
赤い糸

花戸 紗世

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸

【Nコード】

N7236M

【作者名】

花戸 紗世

【あらすじ】

運命って、信じますか？

才色兼備の完璧な義兄、翔馬の心を奪いながらも、八歳年上で元N0・2ホストのパティシエとの淡い恋を守り抜こうとする、けなげな女子高生、綾瀬リサの物語。

l o v e s i c k n e s s

その人と初めて会ったのは、私とその人以外誰もいない夜の公園。
捨てられた仔犬のような、でもどこか人生を諦めたような眼をした
あの人に、私は心を奪われた。

私が家から逃げたのは、とても簡単な理由。

義兄^{あに}が、怖い。

ただそれだけ。

…ある日、義兄は両親が不在なのを見計らって、いきなり私を押し
倒しキスをした。

1年前に父が再婚した相手の女性の連れ子で3歳上の義兄。
まさかという思いでいっぱいだった私は、なんとか逃れようと無我
夢中に近くにあったガラスの置物で義兄の頭を殴り、義兄が怯んだ
瞬間急いで家を飛び出したのだ。

あまり人気の無いその公園にやつとたどり着いてベンチに座った私
は安心し、ようやく涙がこぼれてきたのを憶えている。

ひとしきり泣いて、落ち着き辺りを見渡すと、いつの間にか私が座
っていたベンチの端にその人がいた。ベンチの右端左端に私たちは
座っていた。

その人の腕の中には一匹の白く大人しい子猫。

今まで泣いていたのを見られていたのかと、赤面しながら私は取り
敢えず空を見た。

私は涙を流すと空を見上げる癖があった。

そうすると、早く涙が乾く気がするから。

その人は私が意識していないと本当にいないように感じるほど……
空気のようなというか、不思議な雰囲気をした人。

それでもまだ座っているなとわかるのは、時折薄く香る煙草の匂い。
私はかなりの時間星を見ていた。途中チラッとその人を見るとその
人も同じように空を見ていた。

しばらくそうしていたが、ニャアと白猫が鳴き、その人もゆったり
とした所作で立ち上がった。

私は何となくその人を見ていたら、彼は面倒そうに顔を歪ませ私を
見た。

「……家、帰れよ？」

そう言われ、私は落胆した。ああ、この人もやはり人間だったのか。
その透き通るように白い肌に忠実に幽霊とかならよかったのに。

「……はい」

につこり笑ってそう言った。なるべく元気そうに、につこりと。

早く、私なんか構わず帰ってくれないだろうか。私の念じが伝わっ
たのか、その人は帰っていった。

そして私は軽く笑い、もう両親が帰っているはずの家に戻った。

「……リサ！こんな時間までどこに行ってたんだ。翔馬君が大変だっ
たんだぞ、頭を打ったらしい」

父は慌てた様子でリサをリビングに連れていった。

そこには綺麗に化粧をした顔を涙で歪ませた継母の由梨^{ゆり}と頭に包帯を巻いた義兄が並んでソファに座っていた。

由梨はリサを見つけると少し微笑み、はあとため息をついた。

「この子、こけて机で頭を打ったっていうのよ。どんくさすぎよね」

父は笑って応えた。

「翔馬君は毎日遅くまで勉強しているからな、疲れていたんだろう」

義兄は、はは、と軽く笑声を立てた。

「すみません、心配をかけて。母さんも、別に大丈夫だから」

恥ずかしそうに笑う義兄は、由梨や父の顔を見てはいなかった。

由梨と父が顔を見合わせ義兄から目を逸らした瞬間、義兄は私に向かって笑いかけた。

「…じゃあ、私もう寝るね、おやすみなさい」

「リサ。どこへ行ってたの？」

階段を登り始めた私に義兄が声をかけた。

不自然なほど甘く優しい声に私は思わずビクツとして足を止める。

「え…と、公園に行ったの。友達に…会いに」

あまりにおどおどとした私に、なにを勘違いしたのか由梨が涙ぐんだ。

「リサちゃん…、あなたが家に居なかったから翔馬が怪我をしたわけじゃないわ、気にしないで。優しいのね」

「え……」

戸惑うリサに父はヒラヒラと手をふった。

「ほら、今日はもう休みなさい。明日も早いんだろっ?」

「……うん」

私は重い足で階段を登った。

l o v e s i c k n e s s 2

「それにしても羨ましーよねー」

「ね。棚ぼたつてやつ？少女漫画みたい。…あつ、ほらいた！」

たくさんの人数で固まっている女子生徒たちは教室から窓の外でサッカーをしている、ある男子を見て一斉に頬を染めた。

「かつこいいよお…」

誰かの呟きはその場にいた女子を頷かせた。

昼休み、サッカーをしているのは大人数いるが、なかでもひとときわ目を引く整った容姿。少しくセのある髪をうざったそうに耳に付けるその姿は、どこまでも爽やかだった。

彼女たちが食い入るように見詰めるのは、進学科三年の綾瀬翔馬。あやせしやうま近所でも有名な才色兼備の彼、翔馬を語るときに外せないのが、一年前から義妹として同居している綾瀬リサについて。

元々同じ学校に通っていた二人でも、そんなに群れないタイプのリサは目立つ方では無く、知名度的には対称的だった。が、彼が兄となつてからはリサも同じように有名人となつてしまったのだ。

だが、ほとんどは棚ぼたといつてリサに向けられる目は良いものではない。リサを本当の妹のように可愛がる翔馬の姿も、リサに対する嫉妬に拍車をかけている。

この日も、それは例外では無かった。

「ねえ、何？あの包帯」

「はい？」

リサは弁当を食べる手を止めて、派手に化粧をした相手を見た。
そのポニーテールの女子は、薄く笑いながらリサに訊いた。

「一緒の家なんだから知ってるよね？教えてよリサ」

どうやらただ翔馬の情報が欲しいだけらしく、当然リサがつけた傷
だという事は知らないようだ。

大方、所属するファンクラブの部長にでも頼まれてんだろう。

リサは弁当を片付けながら首を傾げた。

「さあ、なんでかな？帰ってきたらもう怪我してたから、よく知らないんだよね」

ええと不満そうな声をもらすポニーテールをおいて、リサは教室
を出た。

「リサちゃん」

「…琴莉ちゃん！？」

慌てて橋を渡り、異様に可愛い恰好をした琴莉のもとに向かう。

「な、どうしたの琴莉ちゃん。……イベント？」

琴莉はボブの頭に黒いメイドカチューをし、ヒラヒラふわふわしたゴスロリチックなドレスを着ていた。

また、猫目で洋風な顔立ちの琴莉にとってもよく似合っている。

琴莉は誇らしげにクルリと回った。

「違いますよ、これ、制服です。ここの」

そう言つて琴莉は後ろの看板を指差した。

真っ白な看板に可愛らしく茶色の文字で書いてあるのは……。

「スイーツカフェ、『家絵貴』」

琴莉の楽しそうな声を聞きながら、リサは苦笑した。

「すごい名前。琴莉ちゃんここでバイトしてるの？……っていうかまだ中学生だよな」

琴莉はあちゃーという風に頬をかいいた。

「オーナーシェフと私、親戚で。この制服がどうしても着たかったんで、夏休みの1週間だけ勝手に職場体験させてもらってたんですよ。でも、それも明日で終わりなんですよねー」

残念そうに話す琴莉は、それで、とりサを見た。

「さつき、辞めるついでに新しいバイト探してこいって言われたんですよ。で、休憩になったんで外に出てみたら、リサちゃんが」

「バイト？」

リサは少し興味を持った。

「私、してもいいの？」

琴莉は目を輝かせた。

「やったあ。時給900円、日祝日は休みです！」

琴莉は嬉しそうにリサを店の中に連れていった。店内は意外と広く可愛らしいけど品が良く落ち着いた雰囲気だった。

ここなら、あの制服がとても合うだろう。

「てんちよー！見付けました新しいバイト。琴莉の近所のお姉さんで、綾瀬リサちゃんデス」

「こ、こんにちは綾瀬です。白雲高校一年です」

驚きを隠せないリサはおどおどとお辞儀をした。

なんと、オーナーシェフは黒いサングラスに髭を生やしたちょいワル風のおじさん……。

オーナーは、げっという顔をした。

「また未成年か……」

固まったりサとは対称的に琴莉は口を尖らせた。

「しょーがないですよ。こんな可愛い制服なんだし。っていうか今更じゃ無いですか？瑠璃花さんも高一だし。ま、私はまだ中二なんですダメかもだけど」

「あの、無理なら…」

おろおろするリサにオーナーは軽く手を振った。

「いや、大丈夫。しょうがない、何とかなるだろ。あ、じゃあ明日からよろしく。わからない事は琴莉や瑠璃花に訊くと良い」
しかもそれだけ言つとさっさと厨房に引き返して行ってしまった。

呆然とするリサに琴莉はハイ、と制服を差し出した。

「これは試着用みたいなモノですけど。あとで梓さんが…あ、オーナーの奥さんがちゃんとサイズ測つてオーダーメイドの制服をくれますから」

奥の部屋で着替えながら琴莉と話す。

「え、楽しみ。似合うか心配だけどね。あ、すごいね、オーナーさん」

琴莉はクスリと笑んだ。

「びつくりしたでしょ？オーナー。まあ、あのサングラスにもいろんな理由があるんですよ…。すごく良い方なので大丈夫ですよ」

「そうなの？嫌われたのかと思っちゃった…。出来た」

思つたより着心地のよい制服に思わず頬が緩む。

琴莉も嬉しそうに手を叩いた。

「可愛いですよ！これなら瑠璃花さんにも負けないですね。あ、言い忘れてましたけど、梓さんはLittle roseのデザイナーで、設立者でもあるんですよ。だからその制服はちょっとレアなんです」

Little roseって、あの高級ブランド！？
なんか不可思議すぎるカフェだ、とりサは苦笑した。

先に琴莉は帰ってしまったので、リサは先輩で同じ年の瑠璃花と話していた。

瑠璃花は、誰もが美しいと思うだろう今までテレビや雑誌でもお目にかかった事の無い超美少女で、琴莉はああ言っていたがリサはどう頑張ってもこのレベルにはなれないと自分で頷く。

瑠璃花は家絵貴の息子と幼なじみで、2年前から遊びにくるついでに店を手伝うようになったという。

お金は貰ってなかったからええの、と言っている。

「リサちゃん、部活はしてんの？」

ショーケースにケーキを入れながら瑠璃花はリサに尋ねた。

「あ、帰宅部です」

「そうなんや。助かるわー。琴莉が辞めたら仕事増えてどーしよーて思ってたからな。一瞬、私の友達つれてこよか思たけど、多分この制服似合わんし」

瑠璃花はニヤツと笑った。

「ああそうや、それこそウェイターの恰好させればええんか。今度梓さんに頼もかな」

心地よい音でコロコロ笑いながら話す瑠璃花にリサは一気に好感を持った。

「あ、リサちゃん。今日好きなケーキ持ち帰ってえって。オーナーがゆってた」

思わず目を丸くして驚く。

「本当に！？え、じゃあどれにしようかな」

ジーツと選んでいると突然オーナーの声がした。

「おすすめはショート家絵貴とティラミスだよ」
ギョツと振り向いたリサは自分の目を疑った。

「あ、なんや剛さんまだサングラスしてんの？とりいや、ほら」

そう瑠璃花に無理矢理取られ、素顔を見せたオーナーは、さっきと全く別人だった。

しかもなんか髭もない。

瑠璃花はあきれたようにため息をついた。

「おーかた、ずっと寝てなくて腫れた目を隠そうとサングラスしてたんやろ？そんでいま急いで髭剃って来たと」

瑠璃花は手鏡を剛に向け、剃りが甘いアゴをうつした。

「……………新商品作ってたら寝れなくてね。…そんなに美味しそう？」

剛と瑠璃花そっちのけでケーキを見詰めるリサに剛は微笑んだ。

「家族分持つてかえっていいよ」

「わぁ…！ありがとうございます」

瑠璃花はやれやれと肩を落とし、客の注文をとりに行った。

l o v e s i c k n e s s 3

リサは、客が去ったテーブルを片付けながら、少し夕暮れた窓の外の電柱を見た。

（あ、もう1時間たったんだ）

「瑠璃花ちゃん」

休憩時間、リサはふふつと微笑んで瑠璃花に話した。

「さつき、またあの人がいましたよ。くつきりした綺麗な顔の、えっと、玲生さんだっけ」

「……ストーカーやな」

いつもより怒気が強い瑠璃花にリサは驚き、食べていたスイカの新しいスライツから目を離してしまった。

「る、瑠璃花ちゃん？」

「ありえへん、なんなんあいつ。そんな今更知ったかされてもシラソソちゅーの。事実知ったからなに？なにーに期待してんのか知らんけどなあ。一時間ごとに電柱へばりついてどーすんの。なに考えてんのアホが」

まるでそこに玲生がいるかのようにクッションに怒りをぶつける瑠璃花。

だがリサには、その頬がほんのり赤らんでいるようにみえた。

（いいなあ、瑠璃花ちゃんキラキラしてる）

まるで自分とは大違いだ。

リサは気を取り直し、シャーベツトを口に運んだ。
ガラスと部屋の扉が開く、その奇跡のような瞬間までは。

「へえ、リサ、バイトを始めたか。勉強には支障は無いのか？」

夕食時、父の不安そうな顔にリサは微笑んだ。

「大丈夫。バイトの先輩が鈴岡学園の人でね、頭よくて解けないとこは教えてくれるから」

義母、由梨も楽しそうに微笑んだ。

「良かったわね。カフェなんて素敵。このケーキもとても美味しいわ」

リサは時々、売れ残ったスイーツを買って家に持ち帰っていた。

自分が食べたいのもあるが、何より家族の笑顔が見れるのが嬉しかった。

それに、リサはある気がかりもあった。

夕食も終わり、由梨は片付けでキッチン、父はテレビを見に別の部屋にいき、リサは翔馬に話しかけた。

「あの、お兄ちゃん」

吃驚したように一瞬ポカンと口を開けた翔馬だが、慌ててキリツとした顔になった。

翔馬としては、もう覚悟は出来ていた。

「ん？どうしたの」

「……ごめんね、お兄ちゃん。私、つい取り乱して、殴っちゃったりして。お兄ちゃんは別に……そんなつもりじゃなかったのに」

「……………へ」

「わかってるの。あの日はお兄ちゃん、なんか……。帰って来てから隠れてずっと泣いてたし、誰かにフラれたんでしょ？で、悲しくて慰めて欲しくて私に抱きついて、事故でキスしてしまったと」

「え、ちょっとリサ？」

事故扱い？え、ていうか泣いてたの見られてた？

ショックで口を魚のようにパクパク動かす義兄ににっこり微笑んだリサはポンと翔馬の肩を叩いた。

「元気だしてね」

フラれたの、多分初めてだったのかなあ。

イケメンも苦勞するね。

リサはうんうん優しい目で頷いて、部屋に帰ろうと足を向けた。

「……………まじ？」

翔馬はまた湧き出てくる涙を感じ、なんとかリサを呼び止めた。

「リツリサ、こ、このさいだから訊くけど」

「え、なに？」

くるっと振り向いたリサに翔馬は思わず息をのんだ。

決して美少女ではないだろう、多分可愛い、というほうが似合う妹。だが、言わずもがな、翔馬には誰よりも輝いてみえた。

「リサ、いま好きな男とかいるの？」

俺でも構わないよ！

リサは翔馬の願いを知るよしもなく……。
パツと頬を薔薇色に染めた。

「え…いるの？」

愕然とリサの顔を食い入るように見詰めていた翔馬にリサはぶんぶん顔を横にふった。

「ちっ違う！まだ、ちゃんと話もしてないし」

リサはしょぼんと肩を落とした。

「…彼女、いると思う」

そう、和葉と名乗ったそのヒトの手首には、きれいな細いブレスレットがあった。

一度、雑誌で同じものを見たことがあるから、あれはペアだとわかる。

やっぱり、一目惚れはよくないな…。

「だから、いいの」

リサは薄く笑い、翔馬におやすみと小さく呟いた。

「こちら、うちのパティシエの^{ありあけかずは}有明和葉さん。去年までフランス留学してて、今年からうちで働いてもらってる。俺の従兄弟。A型、双子座、24才」

可愛らしい容姿の、店長子息、翔太さんに紹介されたソノヒトは、公園であつたときのぼんやりとあまり人を寄せ付けない雰囲気は微塵も感じさせない柔らかい微笑を浮かべた。

「よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

ペコツとお互に軽く頭を下げ、リサと和葉はケーキの補充をしにシヨーカーズへと向かった。

隣にしゃがみこんだ和葉から、甘い香りが漂ってきた。

「あ、リサさん」

和葉は運ぶケーキから手を離さず声をかけた。

「はい？」

「前、泣いてたのりサさんだよね」

「…あ、はい」

クスリと思わず笑みがこぼれた。

「やっぱり。なんで？」

気になる、というより仲間として仲良くしようという感じで和葉は訊いてきた。

「うーん……今思えば私の早とちりだったと思うんですけどね」

そう言っただけでなかったら、和葉も黙り込んだ。話題を探そうにも、気まずさが流れる。

「あつ、あの綺麗なネコ、和葉さんが飼ってるんですか？」

和葉は追加のロールケーキを運んでながら初めてみる満面の笑みを浮かべた。

「そう。俺のネコ。可愛くない？」

「すっごく可愛かったです。白くて大人しくて」

「だろ？ミィコって言っただ。……あ」

和葉は思い出したように頬に手を当てた。

「煙草、吸ってたの秘密な？前に剛さんにパティシエは煙草吸わないよって笑顔で念おされたからこわいんだよ」

「あ、このバニラの匂いって」

「そうそう。一応夜しか吸ってないんだけどな？わかんないだろ」

クスクス笑って和葉は厨房に向かう。

和葉の手首の細いチェーンがサラリと鳴った。

l o v e s i c k n e s s 4

「文化祭？えー何するん？？めっちゃ行きたい」

「私のところはまだ決まっていなくていいですよー」

リサは苦笑いを浮かべ首を傾げた。

「瑠璃花さんのところはいつですか？」

「うちはな……。家族以外入っちゃダメで娯楽系全部禁止やねん。だから研究とかばっかでおもろくないで？アイドル部も各学年の発表に馬車馬のように使われて」

「きつそーですねー」

クスツと笑うリサに瑠璃花は本気で辛そうなため息をついた。

そんな二人に和葉がおいと声をかけた。

「そろそろ客が来る時間だからー。仕事しろよー？」

慌てて二人で声を揃えた。

「はいー!!」

「……なんかすいません……兄が……」

「いや別に。ケーキここまで減るのは予想外だったけどね？」

厨房の中でも店の賑わいが伝わってくる。

数分前、店を訪れた兄は友人の柚樹大雅と、あの珍客を引き連れてきた。ゆずきたいが

「やつほうリサ バイトどう？楽しんでるう？」

なんだか数日前から人格がガラリと変わった兄は、眩しいほどの笑顔で手を振り店に入ってきた。

「お、お兄ちゃん？」

戸惑うリサより先に、瑠璃花が青い顔をして叫んだ。

「あー！！あんたナニ玲生連れてきてんのあほちゃうか！？」

「なんだよ。俺はケーキが食べたくて…この人にこの店連れてきてもらったんだよ。……あ、すいません、ありがとうございました見ず知らずのかた」

ムツとしたように玲生は言い返し、ペコリと翔馬に礼をした。

「見ず知らずの……ってあんたなあ」

「はいはい、お坊っちゃんまがた席にお連れしてー。ほら、瑠璃花ご注文」

和葉は少しイラッとした顔でにつこり笑った。

そんな和菓を、翔馬がジトツとにらんでいるのにリサは気が付かなかった。

そして、席に着くとすぐに大雅が大量のケーキを注文した。

「んー、今日のおすすめで抹茶クリーム家絵貴と、葡萄タルト、シヨート家絵貴、バイクドチーズ家絵貴、アップルパイ、プチティラミス、シュー家絵貴、あまとりプリンと…ダブルレアチーズ。俺は取り敢えずそんだけ」

瑠璃花の爆笑が忘れられない。

そしてかなりの商品が刻々と今もなお消費されているため、本来ウエイトレスのリサまで厨房で林檎を切ったりといった仕込みを手伝っているのだった。

「琴莉ちゃん、これシヨーケースにいれといて、お願いね」

「はあい、了解です」

まさか人員不足になって琴莉まで駆り出されるとは思わなかった。

（食べ過ぎでしょう柚樹先輩！）

まるで嫌がらせのようだ。まあ、売上は上がるのだろうけれど。

（でも…ちょっと得したかも）

小麦粉を計りながら、チラツと和菓を盗み見る。

スポンジにさつさとクリームを塗っていく姿はどこまでもストイッ

クなんかんじと気品が溢れていた。

（かつこいいー。やっぱりすごいなあ）

そう密かに思っていると、急に和葉はチツと舌打ちした。

「ありえねーあのオヤジ。このいつそがしい時に夫婦旅行いくなよ！ってかせて店閉めてけっつーの」

あーもう腹立つ。と愚痴りながらもちゃっちゃとロールケーキを丸めていく。

「ねえ、なんなのあの大食漢。食うんなら太れよ！ナニあの細さバカにしてんの。だいたいこの暑いのに濃い顔で堂々とスイーツくうなよー」

あまりの毒舌に少し付いていけないリサは慎重に卵を割りながら相づちをつつた。

「… 柚樹先輩は、昔から甘いもの好きらしいです。ちなみにおウチは和菓子屋さん」

「…マジでー。あーもうダメ。やる気でねーどーしょ」

座り込んでしまった和葉にリサは本気で慌てた。

「や、頑張りましょうよ！えっと、ほら柚樹先輩も美味しいから食べてくれてるんでしょし」

「あー…いや、あいつはまだいいんだ。後の二人って、女目当てできてんだろ？それがム力つくー。ケーキ食わねーんなら席空けるよな」

いや多分、柚樹先輩が三人前以上食べてるんでしょうけれども。

リサは前半の言葉に首をひねった。

「え、うちのお兄ちゃんって女目当てだったんですか？全然わからなかった」

確かに瑠璃花は絶世の美少女だし、琴莉は昔から可愛いし。どっちだろう？

「……ふうん？」

本気か？この鈍感娘。

今時もう絶滅したと思ってた。

「えー…と、お前のおにーちゃんって、あんま似てないけど」

「あー。そーなんですよね。父の再婚したひとの連れ子さんで。血縁は無いんです」

「あ、なるほどねー」

（かわいそ、オニーちゃん。前世でどんな悪いことしたんだ？）

急に黙り込んだ和葉に琴莉が叫ぶ。

「マジでヤバイですって！プチティラミスとショート家絵貫、もう全部あのお客さんのお腹の中ですよ！」

l o v e s i c k n e s s 4 (後書き)

分かりづらいのですが、翔馬の親友でクラスメートの柚樹は、本名、柚樹大雅といいます。柚樹は名字です。

l o v e s i c k n e s s

今日もお兄ちゃんは店に来た。

「頑張ってる？リサ」

「…お兄ちゃん、性格変わったよね？」

「へ、そお？ま、こつちが素なだけどね？」

自覚あるんだね…。

前は、近寄りがたいクールで静かな印象だったが。

リサとしては、こちらのほうが話しやすいし、幼い頃とあまり変わらず接する事ができるから、嬉しいのだけれど。

「ねえ、ちゅーもんいい？」

「はい」

リサを押し退けて瑠璃花が大雅の注文をとる。

瞬きするリサに瑠璃花はパチンとウインクした。

『がんば』

リサは赤面しながらも唇を噛みしめ気合いを入れた。

「失礼します！」

勢いよく厨房に入る。

和葉は眉間にしわを寄せた。

「もっと静かに入れよ。っていうかまた来てんのオニーチャンと大食い魔神。毎日来る気か？」

「お兄ちゃんは柚樹先輩に連られて来てるんでしょうけど…あ、玲生さんもいらっしやいましたよ」

「まあ、あの見るからにお坊っちゃま風の健気なストーカー君は置いて。お前のオニーチャンは…」

ほらほら、とナイフを持っていない左手を大きく振り、リサに向かって軽く口角を上げた。

「あ！女目当て！」

「そう！」

「…でも誰？」

「そつりゃーお前…」

「え、知ってるんですか!？」

（エスパー!?!）

和葉は器用にイチゴを切る手を止めた。

「そりゃ、お前」

「…え」

「おまえ〜？」

リサははっと思い出したような顔をした。

「だっ、大丈夫です。私誰にも言いませんから！」

（私、信用ない！？）

リサは、「おまえなんかに言えるかよ〜？」と言われていていると思っていた。

全力で否定する。

「言いふらしたりしません！」

「……………あほっ」

はぁ、と不機嫌な様子でリサから顔を逸らした和葉は本気でイライラとしていた。

（なにコノコ。本当に女子高生？）

せっかく教えてあげようかと思ったのに。

と、ショーケースに補充しに行こうと厨房から出ると、翔馬のキツイ眼光とぶつかった。

「あー…。リサちゃん、ちょっとオープン見ててくれる???」

「いいですけど……?」

怪訝そうなりサを厨房に閉じ込めた和葉は翔馬に軽く会釈した。

「…どうしたんすか?」

「……………」

「…えーっと、お席にケーキお持ちしますので」

席戻って?

和葉のささやかな願いは普通に無視された。

奥の個室からは（食べ過ぎる大雅用の特別部屋）瑠璃花の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

大方、大雅と玲生と談笑しているのだろう。

「あっちは、楽しそうですよ?」

ここまではつきり睨まれては、愛想笑いしか和葉に出来る手段はない。

どうしよう、と目を泳がした和葉に翔馬は突然ニッコリ笑った。

その笑顔に悪寒を感じた和葉はビクツと後ずさった。

「いつも妹がお世話になってます。リサの兄です」

「ああ、いえいえ」

「これからもうかよろしく」

「いつ、いえいえ」

（あれ？俺のがう上…だよな…）

まあ、いつか？

「あ、お兄さん」

「翔馬です」

「……翔馬君。ケーキ食う？出来立てなんすけど」

和葉はアップルパイを指差した。

「や、僕甘いものは」

「あ、そ？リサちゃんがこの林檎切ったんだけどな、残念」

「…じゃー、頂こつかなー？」

ウキウキとした翔馬に、厨房から出てきたリサが嬉しそうな声を出した。

「あ、食べてくれるの？お兄ちゃん！和葉さん特製アップルパイは絶品だよ」

そのアップルパイの味を想像したのかリサはほわあと笑う。

「絶対美味しいよー。…あ！私が席に運んでおくね」

楽しそうにケーキをお盆に乗せて運ぶリサを見て、和葉は関心した。

（…本気で天然ちゃんなんだな……。罪な娘）

チラッと翔馬を見ると、ニッコリ微笑まれたので、和葉もニッコツと微笑んでおいた。

んむしゃむしゃむしゃむしゃ。

「……………柚樹」

むしゃ？むしゃむしゃ。

「…………大雅！」

歩きながら食べていたシュークリームを大雅からもぎ取る。
大雅はむすつと翔馬を見た。

「なにすんだよ」

「っ…………親友がこんなに傷心してんだからちよつとは真面目に聴け！」

「聴いてた。妹ちゃんが心配だーって」

「……そうだよ？」

翔馬はガーンと暗い顔でふふと笑った。

大雅はそういえば、と翔馬の頭を見る。

「……治ったな、怪我」

パニックになったリサに殴られた痕はもう、少し見ただけでは分からないほど消えていた。

「あー……。リサが毎日消毒してくれたからな」

そう、自分の誤解だったと思い込んだリサは毎日献身的に治療をしてくれた。

思わず頬がゆるむ。

大雅は、翔馬をつくづく面白い奴だと思う。こんなコロコロ表情を替えて疲れないのだろうか。

そんな事を思う大雅に構わず翔馬は語り始めた。

「第一何なんだあの制服！どっかの衣装か！？可愛すぎんだろ！」

「ああ、最初は驚いたけどいんじゃない？似合ってるし」

「似合いすぎだ！どーすんだよどっかのオタクに好かれたりしたら！」

「いや……瑠璃花さんが守ってくれると思うが」

翔馬は納得してしまった。あんな美人も初めて見たが、あそこまで男気のある年下も初めて見た。

「な？心配ないって」

「いや。……バカだな大雅。何のために毎日毎日店に通ってる？もちろんあの和葉とかゆーやけに白くて細っそくて…俺と張れるぐらいイケメンのあいつを見張りにいつてんだよ！」

大雅はああ、と頷いた。瑠璃花さんも言っていたが、そういえば妹ちゃんは和葉さんに惚れているとか。

和葉さんは、天才的な旨さの菓子を作るので大尊敬の人物だが、こんなので一応親友。

大雅は翔馬を可哀想な目で見た。

「…なんだよ」

翔馬の言動全てがもう、妹を心配する“お兄ちゃん”になっているのに本人はそれに気付いていないというのが不憫すぎる。

「だから何なんだ！」

「いや……別に」

翔馬ははぁーと長いため息をついた。

大雅から奪ったシュークリームをぽいっと口の中に放る。

「おまえさー…。唯一無二の親友だろ？もつと俺を敬えよ」

何故に敬意を持たねばならないのか。

だが、大雅は少し親友に憐れみを持ち、ぽつりと呟いた。

「見張る為にカフェ通ってるんだったら、なんで妹ちゃんと一緒に家帰らないんだ？」

翔馬はポカンと口を開けた。

大雅は淡々と続ける。

「今頃多分、和葉さんと二人っきりでラヴ・ハプニングとか起きてたりして」

翔馬は風のように駆け出した。

一瞬で見えなくなった親友に大雅は苦笑いを浮かべた。

（だからそれが、愛する妹を守ろーとする“お兄ちゃん”なんだけどな）

l o v e s i c k n e s s 6

最後の客（大食い魔神とその仲間たち 和葉命名）も帰り、外を見ると暗くなっていた。

「よし、店じまいしよかー？」

「うんっ」

和葉は厨房の片付けにいったので店内は瑠璃花とリサでちゃっちゃと済ませ、瑠璃花はじゃ、と急いで店を出ようとした。

「お先失礼しますうー ちょっと急ぐんで」

「そうなんだ…もしかして？」

リサが指差した先にはやっぱり電柱に寄りかかる玲生。

瑠璃花は一瞬げ、と苦い顔をしたが諦めたように玲生の元に駆けていった。

「じゃあな、頑張るんやでー」

「ば…バイバイ」

手を振り、見送ると玲生は瑠璃花に満面の笑みを送っていたが、瑠璃花はふん、と玲生を置いていこうとする。

ショックを受けながらも追いかける玲生の姿があまりに微笑ましくて、リサは一人でクスツと笑った。

「あらー。頑張ってんなあ玲生君」

いつの間にか隣にいた和葉にリサはかなり驚いた。

前から思っていたが、あまり気配を感じさせない人だ。たが決して存在が薄い、という事ではない。

誰とも違う、強烈な個性は、ガンガン伝わってくる。

和葉も帰り支度が終わったようで、私服になっていた。

あまりごちゃごちゃしてないシンプルな服で、華奢でスタイルのよい和葉によく似合っている。

いつも思うが… かつこよすぎ。

和葉は外をチラツと見て、リサに軽く口角を上げて笑んだ。

「送るか？ 暗くなつたし」

「え… いいんですか？」

「ま、（オニーチャンに）バレなかったら大丈夫」

「え？」

「多分俺ん家と方向一緒だしね」

あの公園で泣いてたもんなー？と意地悪く笑う和葉をリサは赤面しながら軽く睨んだ。

道を歩きながら、和葉は思い出したようにリサを見た。

「あー。…明日バイト来れる？日曜なのに悪いんだけど」

「あ…大丈夫です。日曜もやっぱり開店してるんですよ」

琴莉に日曜は休みだと言われていたのをリサは思い出した。
和葉はうーんと微妙な顔で呟いた。

「基本、バイトの学生さんは休みつてしてるんだ。店長の方針は。
でも明日はちょっと忙しいと思うからさー」

「？なにかあるんですか？」

「いやまあ、それは……秘密だけど」

「…気になるじゃないですか」

「気にしなくてっ」

おどける和葉に、リサはふふ、と笑んだ。
和葉はそんなリサの顔を不思議そうに見た。

「なんか、最初の印象と違うな」

「え、そうですか？」

きょとんと見上げてくるこの少女は、最初あの公園で会ったときの
不幸のどん底、といった雰囲気があるでない。
別人かと思うほど。

「ー…。なあ、なんで泣いてたのー？」

かなり気になるが、追求するのはこれで最後にしよう決めて、和葉は訊ねた。

リサは、ああ、と恥ずかしそうに笑った。

「私の勘違いというか。…お兄ちゃんに。…キスされて、パニックになっちゃって」

「えー…。…」

和葉は息をのんだ。
なんとか言葉をだす。

「……でもさ、それってー」

「リサ」

パタッと足を止めた二人の行く手に息を切らした翔馬がいた。

「お、お兄ちゃん？」

「……勘違いなんかじゃねーよ。バカだな」

つかつかと威圧感のある足取りでリサに近づいた翔馬は、隣で固まる和葉には目もくれずに無理矢理リサの唇を塞いだ。

「っ……やめ、て」

俯くようにして翔馬から逃れようとするリサを翔馬は切なげな瞳で

見詰めた。

「リサ、俺は……」

「……ちょっと」

和葉は翔馬からリサを守るように間に立った。

「……止めるよ。嫌がってる」

小刻みに震えるリサの体温を背中に感じながら和葉は言った。

翔馬はゆっくりため息を付いて、ふんわりと微笑んだ。だが少し、口元がひきつっている。

「ごめんリサ、帰ろう?」

（ふざけんなよ……）

和葉は自分でもわからない怒りに似た気持ちをふつふつと感じていた。

翔馬は、なおも笑う。

「俺は、リサのことが好きだよ。…でも、わかった。リサが俺の事を好きになるまで、俺、待つから。だから……」

「ふざけんな」

翔馬は、一瞬瞳を光らせたが、すぐにため息を付いた。

「あんたには関係ない。……ほら、リサこっちおいで。帰ろう?」

甘く優しい声。

王子様のような笑顔。

でも……。

「や……」

小さな、今にも消えてしまいそうな眩き。けれど和葉には、はつきり聞こえた。

思わず口元がゆるんだ和葉は背中にしがみついているリサの頭をポンポンと軽く叩いた。

「じゃ、うちくるか?」

……え?

と、驚いて丸い目を向けるリサにニッと笑いかける。

「ど?」

「……いいの?」

翔馬の息をのむ音が聞こえた。
和葉は翔馬を静かに見た。

「いいっすよね?……翔馬君」

「……っ」

顔を赤らめて歯を食い縛った翔馬は、くるりと背を向けた。

茶色の柔らかな髪が遠ざかるのを、リサはぼうつと見ていた。

気になっていたよ。

どこか、俺やあいつに似た、リサの事は。

公園で泣いているリサを見たとき、

あまりの可愛さに思わず隣に座っていた。

いつ、泣き止むのかな、そう思いながらぼうつとしていると、泣き終わった彼女は俺に気が付いて恥ずかしそうに顔を赤らめ、空を見上げた。

そんな彼女に、俺は他人行儀な心配しか出来なかった。

「……家、帰れよ？」

言ってしまったから後悔した。

家に居たくない理由があつて、こんなとこで泣いているのだろくに。

はあ、俺って馬鹿…。

寂しそうな目をしたリサは柔らかな笑顔を俺に向けてくれた。

「……はい」

小さく、精一杯の明るさを含んだその声から、俺への落胆は、よく伝わってきたよ。

急ぎ足でマンションに帰りながら。

また俺はひとつ。

自分を嫌いになったんだ。

そんな俺が、彼女と再会出来たのは神の悪戯か。

翔太に連れられてリサがいる部屋の戸を開けて。

俺がどれだけ驚いたことが……。

でも、やはり気になったのは、あの夜。
どうして泣いていたの？

「やっぱり。なんで？」

最初に、平静を装って訊いても、スルツとはぐらかせて。
ミーコのほうに興味いつてたし。

まず俺の質問に答えろよ！

おかげで嘘まで付いてしまった。

でも、あの日のように暗くもないし、嘘笑いをすることもなく、
いつも楽しそうに働くリサはとても可愛くて。

……それが少し、心配だった。

そんな時、リサのオニーチャンに初めて会った。
後からリサに本当の兄妹ではないと聞いて、俺を睨む目と、リサを

切なげにみつめる目への説明はいった。

俺は自分でもよくわからないくらい面倒くさい性格で、一時は冗談のように翔馬を応援しようかと思っていた。

「私の勘違いというか。…お兄ちゃんに。…キスされて、パニックになっちゃって」

本気で勘違い、と思っているような困ったような表情のリサに、俺は息をのんだ。

「でも、それってー…」

なにを言おうとしたのか、俺にもわからない。

ただ、思わず口から飛び出してきた。

正直、俺は本気でリサの事を好きなのか…、わからない。

だってリサも、到底俺の事を好きだとは言えないだろう？

リサさん、からリサちゃん、に呼び方が変わったのも、多分気付いてくれてない。

瑠璃花に、さんは他人行儀だとダメ出しされて、変えてみたが。

……どうも、LoveよりLikeのような気がする。

それこそ妹のような。

それで、どこか軽く見ていたのかも知れない。だが……こんな事態を引き起こすなんて。

荒々しくリサに口付ける翔馬を、俺は止められなかった。

だけど。一瞬、苦しそうに俺を見たりサに、やっと決心がついたんだ。

「……止めるよ。嫌がってる」

守ろう、と。

俺に隠れるようにして震えるリサを――。

l o v e s i c k n e s s 8

「入って？テキトーに座つていてね」

有明、と表札に書かれた白いドアの部屋に入る。

（わ、和葉さんの薫り……）

バニラの薫りと、少し煙草の匂いが混ざって。

和葉はバタバタと部屋の窓を開けていた。

「ごめんなー？寒い？」

「いえー……。大丈夫です。……あれ？ミークいない」

和葉はああ、と頭をかいた。

「あいつ、拉致してきたんだよ。隣の奴から」

「ら、拉致？」

うん。と和葉は頷いた。

「隣の奴……ちょっと知り合いなんだけど、そいつが飼ってて。時々貸してもらってたの。……あ。前、俺思わず俺の猫とか嘔吐したんだよな。ごめんね？」

「ふふ……はい」

「あ。麦茶でい？後は酒しかないんだ」

こくりと頷き、その部屋に唯一置かれている黒いソファ―に座る。
和葉も、少し距離をあけてリサの隣に座った。

「……………」

「……………あの」

「いいから。今は、無理して喋らないで」

「……………はい」

「俺ちよつと、煙草吸ってきていい？」

「あ、はい。……………え、あ、ちよつと」

立ち上がった和葉のシャツを掴む。

「そ、外には……………行かないで欲しいんですが……………」

言って、自分の顔が赤くなるのを感じる。

どこまで子供なんだろう……………私。

ビュウ〜と窓から冷たい風が入ってきた。

（あ、そうか……………）

煙草の匂い消すために窓全部……。

和葉は寒そうに眉間にしわを寄せた。

「……よっしゃわかった」

「え？……ええ！？」

窓を全部閉めた後、和葉はベランダに出た。

「ほら、俺いるでしょ」

まあ、ガラス越しに姿は見えますが。

そして窓も閉まって私は寒くないです。

とは言ってもここはマンションの16階。

……寒いでしょ！？

慌てて追いかけようとしたリサを和葉は軽く睨んだ。

「だーめ。副流煙危ないから。待ってて」

「……はあい」

しびしびソファに戻ろうとしたリサに和葉は思い出したように声をかけた。

「……はらへったなー。……なんか、作って」

リサはクルッと嬉しそうに振り向いた。

「キッチン、お借りしますね！」

キッチンは、やはり綺麗に片付いていた。
ちようど冷蔵庫に食材が揃っていたのでハンバーグを作ろうと、材料を切る。

(……私、何してるの?)

お兄ちゃんに……。

でも……そんな事より私。

また、お兄ちゃんを、傷つけた……。

涙は出なかった。

混乱しているのに、その事を考えたくなくて、多分、私、無意識に忘れようとしてる。

前だって……。

(私、気づいてた……?)

お兄ちゃんが、私の事、……好き、だって。

切なそうな、あの瞳を見たのは、今日が初めてじゃ、ない。

でも、考えたくなくて。
だって、私は……。

「あ、こらっ、油使うんならエプロン着ろ！……ほら」

手が汚れている私に、和葉さんはエプロンを広げて着せてくれた。

「あ、ごめんなさい……」

「……いーよ……じゃ、俺待っとくから」

そういつて、和葉さんはまた煙草を持ってベランダに戻った。

だめ。

やっぱり、だめだよお兄ちゃん……。

私……和葉さんが好き。

華奢で、透き通るように白い肌。

あの黒い髪に、触りたい。

いつも不敵な笑みを浮かべて、人を自分のペースに乗っけちゃって。
何でも器用にこなしてしまう人。

でも、時々、ふと遠くを見るような目をして。

その目を見るたびに、胸が締め付けられる。

……そのブレスレットのひとつ、ですか？

私じゃ、だめですか……？

「すげー、マジで旨かった」

「本当ですか？……あ、でも和葉さん、もっと上手に作れそう」

和葉はニツと笑った。

「今度作ってやるかね」

「…はい。勉強させて頂きます」

「ははっ。嘘だって。旨いよ、本当に。すごいな。最近の女子高生は米も研げないのが普通かと思ってた」

「イヤ、まさかー」

「…それがな？実在すんだよ」

リサは瞬きした。

「え、だれですか？」

「琴莉。あいつ米を洗剤で洗いやがった」

「あー……。しそっ……。え、店で？」

「うん。可哀想だったな剛さん。せつかく買った新品の炊飯器壊されて。……。ま、俺が止めれば良かったんだろーけどね」

「そうですよねー……。……」

急に、リサの顔が前の公園で見た顔になった。

……はあ。

「……ごめん、あの話だけど……リサちゃん。君は、どうしたい？……知っていたでしょ、本当は。翔太君が、君の事」

「言わないでっ……」

リサは青い顔で耳を塞いだ。

「……言うよ。……リサちゃん。君はどうしたい？」

静かな、声。

黙り込むリサに、和葉は頬杖をついた。

リサが話し出すのを、待つ。

時計の音が、する。

「なんで……っ」

リサはかすれるような声で、和葉に言った。

「和葉さんは関係ないっ……」

和葉はプツツと自分の中で何かが切れるのを感じた。

「……関係なくねえよっ！！ざけんな！」

ビクッとリサの髪が揺れた。

小さく震え始めたリサの顔を両手で挟み、自分に向かせる。

「……ひとりで、いいのかよ?…俺を頼れよ」

リサの涙が、和葉の手に滑る。
それでもリサは、下を向いた。

「…無理…」

「………なんで」

「だって……。私……。和葉さんに頼ったら…」

「なに」

無理矢理視線を合わせ、強い口調と視線をリサに向ける。

リサも、ギョッと口を引き結んだ。

「……俺を頼つたらなに」

「………ます」

「…え、なに?」

「私…好きに、なっちゃいますよ…?和葉さんの事………」

ぽつりとリサは呟いた。

思わず、リサの顔をつかんでいた両手からパタンと力が抜ける。

リサの目から、大粒の涙が零れた。

悲しそうな顔をして、ソファから立ち上がろうとしたリサの手を和葉は掴んだ。

「リサ……。待って」

「……………離して下さい」

和葉はため息をついて立ち上がった。

「……………おい」

大雅は窓からよじ登ってくる親友に思いっきり迷惑そうな顔をした。

「……………ここは俺の家で、お前のよじ登ってる窓は俺の部屋のだ」

「つゝゝ！わかってるよ！！」

転げ落ちるように着地した翔馬は真っ赤に泣き腫らした目をしていた。

そのままベタッと土下座してくる。

「お……………お泊まりさせて……………下さい……………」

「……………」

小動物のような瞳を向けてくる。

大雅は、反論を諦めた。

「……で？今度は何をしたんだ」

ウキウキと自分の布団を敷き始めた翔馬は恥ずかしそうに笑った。

「決め付けるなよ」

「馬鹿。理由なく来たんなら叩き出すぞ」

「……まあ、お前に相談しにきたっていうのが7割くらいあるからな……。……あのな、大雅……」

「……なんだ」

「腹減ったよ」

大雅は枕を投げつけた。

思えば、何故あの時リサを抱き締めたのか…。

俺は、微笑むことさえ、出来なかったのに。

腕の中にいるリサはやっぱり震えていた。

俺は、何にも言えなかった。

L o v e じゃない、とか思っておきながら、この胸の痛みを理解して肯定してもいいのか、俺は迷っていた。

だけど…この暖かさを逃してしまうのは、あまりにも惜しくて。

またため息をついた俺を、リサはぐいっと押し返した。

顔を見るとまた、ポロポロ涙をこぼしている。

悲しい、少し怒ったような表情の彼女を、綺麗だなあと不謹慎にも思ってしまう。

「もう、いいです。自分勝手なことばかりして、ごめんなさい」

勝手な事ばかりしているのは俺のほうなはずなのに、リサは謝って出ていこうとした。

玄関まで行かれて、やっと俺は声が出た。

「リサ……。待って」

「……………」

振り返らず、ただ動きを止めただけのリサに、これが最後だと、漠然と俺は感じた。

「……ごめん。俺は、今まで女の人をちゃんと愛した事が無いんだ……。恋も、したことないと思う。……そんな俺を、選んで……いいの？……俺は、リサの事を、好きになれないかも知れないのに」

リサを可愛いな、とは何度も思った。

でもそれが、ミーコ可愛いな、とかこのケーキのデザイン可愛いな、とかと違うかと言われたら……正直悩んでしまう。

10代の頃のように遊びで付き合うのなら、こんな事はいちいち考えなかったけど、リサをそんな風に傷付けたくは無かった。

だから……もういつそのことフって欲しい。

俺は、本当に嫌な奴なんだよ？

なのに……。

君はまだ泣いている。

そして俺に微笑んだんだ。

「……私は、和葉さんが好きです。好きになってくれなくて、いいから……。好きで、いさせて下さい……」

「…本当に、いいの？」

傷付けたく…無いのに。

俺は、リサを傷付けないという自信が…無いよ。

「なあ……俺って最低な男なのかな……？」

大雅は隣の布団に寝転ぶ翔馬にしつかりと頷いた。

「确实」

「……………わかってるよ」

大雅の視線を感じながら、翔馬は淡々と続けた。

「だけど…。今まで俺がずっと好きだったのに、あんな男にリサを奪われると思ったたら……」

自分を、止められなかった。

暗い瞳の翔馬に大雅はため息をついた。

「お前…成績はいいのにな。どーして肝心なところでバカなんだよ。
……俺はそういうの、嫌いじゃないけど」

「……………」

「突っ走れよ。お前が迷ってどうすんだ。好きなんだろ？奪われる前に奪えばいい」

「……でも、俺はー：“お兄ちゃん”なんだよ。リサにとってこいつは…。

真面目な顔して、マジでバカだな。

「…くだんね。俺寝るわ」

「ちよっ……。いいのかな…？俺、欲張っても」

大雅は眠そうな顔で片目だけ開けて、翔馬を睨んだ。

「お前は、どうしたいんだよ。“翔馬”。欲しいんだろ？手に入るよ。じゃなかったらスッパリ諦めて、応援しろ。和葉さんとの恋」

「……いやだ」

「……………で？」

「……欲張る」

大雅は初めて口元をゆるめた。

「がんばれよ」

l o v e s i c k n e s s 1 0

キツクアマイ、香水の薰り。

『カズハ……………』

…やめろ。言うな、言うなよ。

お願いだからー…。

その女は、出会った頃の素直で無邪気な笑顔を、完全に脱ぎ捨てていた。

切なそうな、色香を含んだ表情で、俺を見る。

なんで、お前なんだよ……………。

なんで、お前は……………。

俺たちの前に、現れたの？

ジリリリリ…！！

目覚ましの音がした。

パタパタと焦ったような足音も聞こえた。

けど…俺は自分の息を整えるのに精一杯で、目覚ましを消すことさえ、出来なかった。

夢…。

もぐりこんだ布団の隙間から、なにやら目覚ましを手にとって悩んでいるリサの姿が見えた。

ジリリリリ……！

リサは悩んでいた。

消したいけど、この目覚まし時計はまだ役目を終えていない。

…和葉さんが、起きてこない。

どうしよう……。

消す？消さない？

うーんと首を傾げている間にも、時計は辛抱強く鳴り続け……。

和葉さんは微動だにしない。

リサは思いきった行動に出ることにした。

目覚ましを持ったまま、ベッドで眠る和葉に近づく。

ジリリリリ……！！！！

「……わーかった。……………それ消して……………」

「あ、はい」

チンッ。

あっけなく静けさを取り戻した部屋で、和葉はむっくりと起き上がった。

「……………おはよ」

じっと目を見られて、思わずリサは赤面した。

「おはようございます……」

「……………眠れた？ごめんねソファで」

「あ、いえ。すごい熟睡できました」

……そーでしょーね。

和葉は寝不足の目をこすった。

夜、ドサツと重い音がしたからなにかと思ってリサが寝ているリビングに行く、案の定。

ソファから転げ落ちてなお冷たいフローリングですやすや眠るリサ。

それから三回はソファにリサを戻す作業をした。

全く。俺は保育士さんじゃないから！

いつ理性が飛んでくか、ヒヤヒヤもんだったんだからね！！

あんたいくつよ！？

おかげで浅い眠りについて、嫌な過去まで思い出してしまった。

「和葉さん……？」

ボーッとしていた俺をリサが心配そうに見詰めた。

……ぶかぶかな俺のシャツ着て……。

可愛いすぎんだよ、もうっ！

「あ、ごめんごめん。………あっ！今何時！？」

「え！？………6時12分です」

和葉はガバツとベッドから降り、慌ててキッチンに走った。

「……やっべえ！………あーでも軽めで………」

手伝おうとまだ寝ぼけた顔でトコトコ歩くりサに和葉はギッと強い視線を向けた。

「いーから。あと15分で家出るからね」

「は、はいっ」

とりあえず洗面所で急いで歯と顔を洗い、昨日着ていた服を着る。
ちゃっちゃんと髪を整える。

「着替えた？」

「あ、どうぞっ」

「ごめんね。……あ」

歯を磨き終わった和葉はやばい、と口を動かした。

リサにくるりと目線を合わす。

「…五月蠅いヤツがく…」

『かーずは あーけーろーよーお』

ドントンとドアを叩く音がする。

「無視していいからね」

「いや、そんなワケには」

『和葉ー？あけろよー』

「つたく…（怒）」

すたすたと玄関のドアに近づいた和葉は鍵をガチャンと開けた。

「……………今日はちょっと帰ってくれ…」

「おっはよー！なんだよーほら。愛しのミーコ連れてきてやったのに」

「ニューー…」。

あまりに可愛らしい鳴き声に、リサはひょいっと顔を出してしまった。

「あっ！こらリサ」

「え、可愛い　なに誰どーゆー関係ー？」

「……………わかった。もう家入っていいから。静かにしてくれ…」

ミーコを抱いた和葉は力尽きたように肩を落とした。

「なんだー。家絵貴のバイトちゃんねー？あそこは美人ばっかだからな」

そう言って笑いながらリサの右隣を歩くお隣さん。

（足ながーい…………）

和葉も華奢で綺麗なプロポーションをしているが、加えての高い身長のお隣さんはモデルみたい。

「そうならそうと早く言えばいいのに。俺、まさか和葉にやつと彼女が出来たのかと……」

「井上。五月蠅い」

少し切れ長の目でジトツと井上をにらんだ和葉に、リサは頭を傾けた。

「井上…さん？」

「ああ俺、本名は井上正宗まさむねっていいます 和葉とは高校からのダチ」

柔らかく清々しい笑みでリサに握手を求めて伸ばした右手を和葉が無言で払い落とした。

和葉が正宗の隣になるように、リサを自分の左側におく。

繋がれた手から体温が伝わって、リサはかあつと顔が赤くなるのを感じた。

そんなリサをチラツと見た正宗は不満そうな声をもらした。

「過保護ーっ」

「るせえ。ホストに気ー許せるかよ」

「……ホスト？」

どこか感動した様子で見えてくるリサに正宗は苦笑いを浮かべた。

「仕事っていうか…。趣味？平日の19時〜23時までしかやってないもん」

「趣味ですんな」

冷たい和葉の声に正宗はむっと頬を膨らませた。

「なんだよ。お前だっしてたじゃん。半年だけだったけどさー」

驚くりサに目も合わず、苛立った様子で呟いた。

「マジうぜえ……………」

不機嫌な和葉に気が付かない正宗に、リサは慌てて訊ねた。

「え、じゃあお仕事って…？」

正宗は得意気に胸をはった。

「ペットショップの店員！店にミ〜コ連れてけるし、俺にぴったりじゃない？」

和葉はくいつと少し強くりサの手をひいた。

「…んじゃ、正宗またな」

正宗は呆れたように微笑んだ。

「んー。バイバイ」

「行くよ」

すたすた歩く和葉を追いかけているが、リサは少し焦ったように訊ねた。

「かつ……和葉さん！」

「ん」

「そっちお店じゃ……ないですよね？」

「ああ……騙すような事して本当に悪いと思ってるんだけど、ちょっと黙ってついてきてくれる？」

リサは明らかに戸惑っている。

「ただ俺は寝不足と井上で少し不機嫌な事もあるって、何も説明しないでその噴水前についた。」

「……待ち合わせしてるんだ」

「はあ………」

すると、前の駅のほうでなにやら人々がざわめいている。

（？芸能人さんでも見付かったのかな？）

と、そのすこし背の低い少女がリサたちに向かって小走りで近づいてきた。

「…えっ、瑠璃花ちゃん!？」

吃驚して口をふさいだリサに、瑠璃花は気まずそうに微笑んだ。

「ごめんな待った? 電車がちょっと遅れて…。…ってどーした
ん和葉さん」

瑠璃花は珍獣でも見るような目付き首を傾げた。

「聞いたで。昨日リサを家に泊ませたんやろ?」

「ああ……っていつか誰に聞いたの」

「大雅さん。……それでなんでそんな機嫌悪いんです?」

和葉はニツコリ笑った。

「別に? それより早くリサを着替えさせて来て? 俺、先に行ってるから」

瑠璃花は納得いかない顔でため息をついた。

「了解。1時にそっち着けばいいんな? ほらリサ行くで」

「えっ…と」

腕をくまれて半ば瑠璃花に連行されているようなりサに和葉は軽く手を振った。

「じゃ、また」

「は……はい」

リサは不安そうな表情を浮かべながらも少し微笑んで和葉に手を振った。

l o v e s i c k n e s s 11

「はあゝ！？なんやそれ。え、ありえへんやろ和葉さん。こんな可愛い娘にそこまで言わせといて。』…俺は、リサの事を、好きになれないかも知れないのに』て」

リサは心の中で和葉に謝った。

でも、なんか楽しいな。

「でもなー…私もちよっと心配。本当にええの？」

黙って微笑むリサ。

（…）。お互い、一筋縄ではいかん相手やからなあゝ大変そうなんやけど）

「……まあ、応援するけどさ」

「うん……。それに…フラれたわけじゃないから、本当は私嬉しいの」

「和葉さんには勿体ないなあ……あ、これしよ」

瑠璃花は落ち着いた茶色のワンピースを手にとった。
レースのリボンが可愛く使ってあり柔らかない印象で、絶対リサに似合う。

リサも気になったようで少し身を乗り出した。

瑠璃花はさっきから視線を感じる店員の方を振り向いた。

「すいませーん、これ試着していいーですか？」

かなりレベルの高い美少女二人組を少し遠巻きにマークしていたシヨップ店員は満面の笑顔で近づいてきた。

「はぁーい、こちらへどうぞー」

「じゃ、リサ行っておいで」

「え、私が着るの？」

うん。と瑠璃花が頷き、リサは戸惑いぎみに試着室に向かった。

靴とアクセサリーも選び、さっきの店員に言づける。

「これも、あの娘にお願いできます？」

「はいはい、お任せ下さい」

ポス、と近くにあった椅子に座り、携帯をいじる。

数秒で、電話がかかってきた。

「もしもし？」

『綾瀬ですけど……。リサは？』

「ん？いま試着室」

『……は？なにそれ』

「今さ、ちよつと突然気になったんやけど、大丈夫やんな？ご両親心配させとらん？」

『…リサが、それ心配してたの？』

瑠璃花は無意識レベルで顔がひきつるのを感じた。

こいつ…リサしか言えんのかい。

「いや、ちゃうけど。大丈夫なんでしょ？」

『ああ……。昨日から明日の午後まで小旅行に行ってる』

（…大丈夫、では無いつてことかい）

なんかチクる気満々、みたいに聞こえて瑠璃花は眉をひそめた。

それに気が付いたのかは知らないが、翔馬は少しため息をついた。

『……勘違いすんなよ？俺は卑怯なコトしないから。安心して』

「ふーん…と。タイムオーバー。ごめんなさい、また」

ピツと手早く電話を切り、カーテンから顔を覗かせたりリサのところにいった。

「あ、やっぱり可愛いー。それにしよ。靴もぴったりやった？」

「うん……でも、なんで？……あ！ちょっと待って、お会計私する！」

瑠璃花はニヤツと笑って店員にカードを差し出した。

「えーよ 後から和葉さんに貰ってもええし。あ、カードで」

和葉はキュツとエプロンを結んだ。

（……さて）

葡萄、梨、栗……。

綺麗に盛られた果実。

新鮮な卵、最高級の小麦粉、砂糖。

和葉はぼそりと呟いた。

「いーじゃん」

他のパティシエが一心不乱に手を動かす中、和葉はんーと背伸びをした。

プルプルと携帯を握りしめたまま震える翔馬を可哀想に見詰めた後、大雅は自分の携帯で手早くメールを打った。

《こんちわ 翔馬は俺が見とくから心配しないでいーよ。駅前のホテルにもちゃんと連れてく》

少し待つと、携帯が震えた。

《よろしく！（b^ー。）》

ボタンと携帯を閉じ、まだ落ち込んでいる翔馬の腕をグイッと引いた。

「ほら、行くぞ。今日は行きたい所があんだよ。付き合え」

「……えー…。どこいくんだよー」

大雅は鏡の前で帽子を直し、あっけらかんと言った。

「散歩。ま、いーからついてこい」

宿と朝ご飯の恩義がある翔馬はしぶしぶながら靴をはいた。

l o v e s i c k n e s s 1 2

「お客さん来ないねえ」

「ニーイ」

「お腹へった？」

「ニーイ」

「はいはいちょっと待っててね」

ついでに他の動物にも餌をあげようと店に出た正宗はその“客”にあんぐりアゴを落とした。

次いで警戒の眼差しを浮かべながらも微笑んで会釈する。

「……お久しぶりー。……彩乃^{あやの}サン？」

正宗より3歳年上の彩乃はやりわりと妖艶な笑みを正宗に向けた。

青い顔をして立ちつくす正宗をからかうようにクスクス笑う。

「まさかペットショップで働いてるなんて。驚いたわ？」

「…………元々、夢だったんでね。…何しに来たのー？」

「…カズハ、どこ？」

急に真剣な眼差しをした彩乃に正宗も真顔に戻った。

「俺が教えると思う？あいつだって会いたくないと思うよ？彩乃サン、あいつにサイテーな事したんだから。自覚あんの？」

彩乃は微笑んで踵を返した。

「じゃあね。邪魔したわ」

「……あいつにもう関わるなよ。やっと幸せにー……」

正宗は失言に気付き口を閉ざしたが、それがもつと不自然になってしまった。

彩乃は見るからに苛ついた様子で歌うように呟いた。

「ふーん？？？彼女でも出来たの？」

「……そうだよ。彩乃サンなんか出る幕ないくらい可愛い娘だよ。……マジで帰って。俺らの前にもう姿を見せないでよ」

正宗は自分に嫌気がさしながら喋った。

ホストなんかやってるくせに、親友を守る嘘さえつけない。しかも、火を付けてしまったかも知れない……。

バツカじゃねえの俺……。

彩乃は楽しそうにため息をついて手を振り、店を出ていった。

「おい……大雅ー？。どこ行くだよ。どうしてそんな無計画でずんどこ歩けるんだお前は。そんでなぜ着替えんだよ」

翔馬も、普通にきちんとした服になっていた。

大雅は家を出たときから襟つきを着ている。

「はいはい。ほら、着いた」

翔馬は首を傾げた。

「…百目鬼第三ホテル？なに、なんで？」

伝統も格式もある高級ホテルだ。

ここに入るのなら、そりゃあ服に気をつかわないといけないが。

「今日、ここにリサちゃん来る。瑠璃花ちゃんと一緒に」

「……………は」

すたすた歩く大雅の後をしぶしぶ付いていた翔馬はピタッと歩を止めた。

面倒くさそうに翔馬のほうを振り返った大雅はなだめるような目を向けた。

「来いよ。その方がお前の為だ。諦めるか奪いかえすか。今日ここで決める」

やっぱ奪われてんのかよ…………。

「…………勝手なこというなよ」

大雅は翔馬の腕をつかんでホテルの入口をくぐった。

「いらっしやいませ」

「もうしょうがねーだろ。はらくくれ」

「…………どこ行くんのだ？」

ああ、と大雅は思い出したように呟いた。

「コレ」

大きなチラシを見る。

読んで、翔馬は啞然とした。

「…『秋のスイーツ新作コレクション』…………?」

大雅たちが着く少し前に到着したりサたちは、ホテル内にあるカフェにいた。

瑠璃花から笑みと一緒に渡された一枚の小さなチラシに目が点になる。

そしてそのパティシエの名前が載せられた一角に、小さく有明和葉という名。

「…ま、今回は若手の力試してみたいな感じ？それぞれのパティシエが働いてる店の名前も載るしけっこう有名なパティシエだから、各パティシエの今後の評価にもつながるんよね」

大きなパーティー会場で、各パティシエが精魂込めて作ったスイーツが、製作者の名と一緒に置かれ、その筋の専門家や雑誌などの関係者たちが試食し評価する。
良い評価を貰えれば一躍有名パティシエになれるが、悪い評価だと家絵貴の格まで落ちる。

瑠璃花のかいつまんだ説明でも、すごく重要で大切なパーティーだとリサでも分かる。

「そ、それは……邪魔するわけには」

「でも、和葉さんの様子、見たいやろ？」

「う……それは、まあ」

瑠璃花はニヤツと笑った。

「邪魔なんかせーへんよ。こっちは招待されてんのやから。ケーキ食べ放題やで」

ほら、と瑠璃花は一枚のハガキを出した。

「え。なんで私も？」

「私、ちょっとこのホテルの息子と知り合いでな？特別発行。私とリサ。あと、大雅さんと翔馬さんのも作ってもらった」

リサは元々大きな目をもっと大きくした。

「お、兄ちゃん、くるの？」

何がどうなっているのか、全く理解出来ない。

瑠璃花は軽く頷いた。

「勝手に話進めてごめんな。でも、早く決着つけたほうがええと思
て」

キュッと唇を噛み締めたリサは少し笑った。

「うっん……」

「…確認やけど。リサは、和葉さんが好きなんよな？」

リサはむせた。

「げほっ……」

（…なんでなんかなあ。私の友達って変人を好きになるんやな…）

リサは顔を赤らめ視線をさまよわせた。

「す…好きよ？」

「……好きになってももらえるかどうか、わからへんのやろ？」

「いいの」

「……ホンマ？」

「……いいの」

微笑むリサは少し大人びて見えた。

瑠璃花は少し、羨ましいなとリサを見詰めた。

瑠璃花も美妃も、誰かにここまで…自分が傷付く覚悟で恋したことは無いから。

（……私は、傷ついたら一目散に逃げる女やし）

そんな恋の…相手に出会ったリサが羨ましい。

だが同時に、瑠璃花はリサの手をギュッと握っていた。

「え？」

「…辛くなったら、私がなんとかしたる。頼ってな？」

リサははっと息をのんだ。

頼れ………和葉にも言われた。

だけど…ここで翔馬に逢うと聞いて、誰かに頼ろうと……ましてや和葉に頼ろうとは！。

（私…また間違えた？）

せっかく、好きになっていいって、言ってもらえたのに。

「……………リサ」

ポロポロ涙を溢すリサの手をさする。

ボン

壁掛け時計が低く鳴った。

瑠璃花はリサの頬をハンカチで拭い、ニコツとリサに微笑んで立ち上がった。

「1回、軽く化粧直してから行こか？」

「うん…」

l o v e s i c k n e s s 1 3

秋のスイーツ新作コレクション

・開催内容

若いパティシエの育成。優秀な人材の発掘とする。

・開催場所

百目鬼第三ホテル。

・参加対象

和洋菓子店、製パン店で製造技術者として勤務しているもの
1事業者1作品とする

・参加料

無料

・表彰

- (1) グランプリ 1点 賞金30万円、トロフィー
- (2) 特別賞 1点 トロフィー

『…………で?』

怒気を含んだ声色に思わず背筋が凍る。

「で…………リサちゃん…」

『ばらしたのかよ?』

「ご、ごめん…。でも俺」

『あ?』

「すみません…。俺が甘かった…」

はあ、と和葉はため息をついた。

『これからどうなる事か…。だいたいお前こんな時に電話してきやがって』

「あ…!ごめん」

『いーちょうど休憩時間だったから。でももう始まるわ。切るな?』

「う、マジでごめん。……頑張って」

自分でも、どっちの事を言っているのか分からなかったが、和葉は軽く応えてくれた。

『おう。じゃあな』

…プツツと電話が切れた後、正宗はズルズルと壁に体重をかけて座り込んだ。

「俺、最悪だー…」

彩乃には最大の警戒心を持っていたのに。

ってというか俺、プライベートと仕事の区別には自信あったのに。

……せつかく、和葉が立ち直ったのに。

頭を抱える正宗に、携帯がピロリンツと鳴った。見ると、和葉からのメール。

《気にすんなよー!!》

「……和葉あゝ」

正宗は嬉しくて涙がこぼれた。

作り終えたスイーツが係員によって会場に運ばれるのを見ながら、和葉は呟いた。

「……………バカ」

あまりにも落ち込んでいた正宗に励ましのメールを送ってから、和葉はあー、と瞑目した。

彩乃か……………。

どうして、あの日から二年も経った今、接触してきたのか……………。

今はホストとしてAppleで働いてないとは言っても、俺の居

場所なんかすぐ分かるだろうに、俺ではなく正宗に先に会いに行つて情報を聞き出した意味は…。

（あー、くそっ）

どう転んでも、面倒な事になるのは避けられなさそうだ。

「あつ、やー、どうも有明さん」

雑誌の記者が近付いてきたので、営業スマイルで軽く会釈した。

「わあー…」

リサは思わず瑠璃花の腕にキュッとしがみついた。

あまりに広くキラキラとした会場で、お菓子の甘い匂いだけが充満している。いかにも、といった感じの人々がケーキを厳しい目で見たり食べたりしている。

会場の真ん中を深い青色のテーブルクロスが引かれたテーブルがまっすぐにのびていて、その上に品よく間隔をとられてスイーツが美しく飾られていた。パティシエは別室で控えているようだ。

その、右端よりの真ん中に、和葉の作品があつた。

見て、瑠璃花はニヤツと笑った。

「和葉さんらしー」

「美味しそう……」

“和栗のモンブラン” 多くに仰々しい名前が付けられている中、少し遊び心のある簡素な名前は、他の招待客にもうけているようだった。

試食用のモンブランが無くなってしまいそうな勢いだったので、一つを二人で分けることにした。

瑠璃花とリサは顔を見合わせた。

「……美味しいね」

「…店のケーキは本気で作つとらんっちゅーことか？」

リサも瑠璃花も分かったが、和葉は本気というか、家絵貴のスイーツを作る時には、多分剛オーナーの味に合わせているようだ。

決してオーナーの味が和葉に劣っていることは無いのだが、このモンブランは和葉らしさ、が出ていて個性的だった。

土台はパウンドケーキで上にマロンクリームが絞ってあって、頂上の栗甘煮は本当に美味しい。

最も特徴的なのはマロンクリームだろう。

リサはここまで栗！といったモンブランは初めて食べた。

瑠璃花はリサに笑いかけた。

「すごいな、和葉さん。来てよかったやろ？」

「うん……あ」

リサはビクツと身を縮ませた。

瑠璃花はリサの目線の先に大雅に引きずられるように歩く翔馬を見つけた。

瑠璃花は大きく手を振った。

「おい」

大雅がそれに気づき、こちらに来た。

「ごめん遅れた。こいつが抵抗しやがって」

「いや大丈夫。じゃ」

リサの手をほどいた瑠璃花は神妙な顔をした翔馬の腕を掴んだ。

「トレード」

「へ？」

瑠璃花は混乱した翔馬を連れてどこかへ消えた。

「……いったな」

「はい……ん？ 柚樹先輩」

笑顔のまま固まるリサに、大雅はテーブルを指差した。

「せっかく来たんだし、食お」

「は、はいっ」

「おい、どこいくんだよ……………ひっ」

振り返った瑠璃花の鬼のような形相に思わず声がもれた。

「なんや、えつらそーやなあ？このあほんだらあ」

「……………」

「あんたあんなピュアガール傷つけといてよくここまで来れたなあ。その勇氣には乾杯したらあ」

「……………どうも」

反応の薄い翔馬に舌打ちした瑠璃花はで？と完璧な笑顔を作った。

「こっからどないするん？答によっちゃあ殺すで」

「おお、物騒だな」

「諦めえよ。リサが和葉さんにベタばれなん、分かるやろ。あんたストーリーみたくなるで」

翔馬は声をたてて笑った。

「なるほど。現にストーカーされてる奴の言うことは重みが違うな」

……この性悪男。

「…何が気に入らんの？年？」

「…別に。いいだろ兄貴なんだから。妹の心配したって」

瑠璃花は鼻で笑った。こっちはもう、リサから血繋がってない事くらい知ってる。

「兄貴が妹にチューするんか！？なんなんあんた。兄貴なん？…あーそう、変態認めるんやな」

「…………おせっかいな女」

瑠璃花は無視することにした。大袈裟にため息をつく。

「…………まあ、ええわ。リサは私の家に泊まらず。あんたと一緒にはいたないやろし、和葉さんちに置いとくのもどうかと思うし。今日はそれ言っとこ思てん」

翔馬は本気で驚いたように瑠璃花を見た。

「なに？あ、なんやったらこのホテルの部屋に泊らせんのも出来るけど」

「…お前、意外といいやつだな」

「あ？」

「リサのことはお前に任せる。よろしくな」

「……………はあ」

翔馬は少し首を傾げた。

「もう行っても？」

「……………ええけど、あんたは大雅さん係やから」

今頃無制限にケーキをがつついているのだろうか……………。

翔馬は軽く頷いた。

渋い顔で腕組みをした瑠璃花に翔馬は少し微笑んだ。

「俺、欲張ることに決めたんだ。リサは渡さない」

「……そ。せいぜい頑張り」

翔馬が居なくなるのを確認してから、

瑠璃花は光続ける携帯を開いた。

薄く化粧して、少し大人っぽいワンピースのリサは本気で可愛かった。

ま、俺を見て怯えてるのは分かったけど……。

あーあ、俺、こんな後先考えずに動く奴じゃなかったのにな……。何のために10年も我慢してきたのか……。

超絶美少女に説教されて、思わず生意気な態度をとってしまった（年下に）けど、俺マジ何してんだろーと思うことばかり。

その後慌てて大雅のそこに行ってみたけど、食い荒らしてる様子は全く無かった。

ていうか、雑誌のカメラマンっぽい人に写真とられてたんすけど。

「あ、……お兄ちゃん」

少し離れた所でその様子を珍しげに見ていたリサは俺に気付いて微笑もうとして……固まった。

居心地悪そうにうつむく。

「……なにが旨かった？」

「……全部、美味しかったよ？」

「ああ…そうだな」

リサは思いきったように俺を見た。

「お兄ちゃん」

「……………うん」

「……………やっぱり」

「リサ……………」

俺は身をかめた。

キスしようとして。

学習能力が無いって？

恋にそんなの、必要ないよ。

あと数センチ、リサが顔を逸らした瞬間……。

「きゃー！カワイー」

「おっ、いたぞ！ケーキ君発見！カメラマン！」

「抱きつかれてるゝ いいなあー」

俺はやっと状況を把握した。

やけにモハモハしたそいつの腕の中で俺はもがいた。

「なっ！はなせえー！」

その…俺より一回り大きなキグルミは沢山の人に囲まれて俺をばいっとリサと真逆の方向に放り出した。

（あ、あいつ……）

リサに可愛らしい動作でケーキを差し出したそいつは、カメラマンにポーズを決めている。

俺はアレの中身をほぼ確信の直感で分かった。

（かつ……和葉……！）

仲良くデジカメと携帯を構える瑠璃花と大雅に、俺はがっくりと俯いた。

（ふう……あつぶねー）

客に手を振りながらキグルミ和葉は瑠璃花に感謝していた。

少し前、瑠璃花に彩乃の事を伝えた。

遅かれ早かれ瑠璃花には分かっってしまうだろうし、彩乃がリサに危害を加える恐れも、無いと言い切れなかったから。

詳しい昔話はしていないけど、瑠璃花は賢いから察してくれたようだ。

でもその後…。

「あ、言うたらなかったけど、今日翔馬くん来とるで」

「……………え？」

聞いてないよ？

俺はキレた。

「なんで言わないんだよ！っていうか今日、けっこう俺には大事な日なんだけど！？」

瑠璃花は苦い顔をした。

「だから言わんかったんやんか…。いやんもう。あと30分で結果でるし」

「よかねえよ！……………あーもう最っ悪だ」

頼れよ、とか言ったくせに俺…。

「あー、あーりーえーないー」

頭を抱えてしゃがみこんだ俺に、瑠璃花は思い付いたように指を鳴らした。

（そんで今、ケーキ君でえすうー）

今回のコレクションの主催である菓子会社のイメージキャラクター、ケーキ君

ぽかんと可愛い顔をしているリサにやれやれとアメリカ人ぽくりアクションしてみる。

（だーれの為にこんなことしてんのよ）

あーあ。

俺は自分に訊いた。

（俺って、リサのことが好きなのかな？）

正直わかんない。

でも、そんな俺でも好きだって言ってくれるんならー…。

俺、もう少しそばにいてもいいよね？

「お？なんかモンブランが無いんだけど」

オーナーシェフの剛がショーケースを見て首を傾げた。

顔を見合わせた瑠璃花とリサが口を開く前に、のっそりと和葉が厨房から出てきた。

暗い声でポソツと呟く。

「剛さん……俺はもうダメっす」

「は？」

「モンブランはもう……当分作れない……」

「…なにがあっただんだ和葉…」

事情を知らない剛にリサは囁いた。

「二位だったんです…」

「え、なにが？」

「この前の、秋のスイーツコレクション……モンブランで」

剛は目を見開いた。

「うそ！？誰、一番」

瑠璃花はぴらっとチラシを剛に渡した。

「……吉良スイーツの…佐藤君？聞いたこと無いけど」

「つい最近まで留学してたんやて」

「だからってそんなに落ち込まないでも…二位だって僅差なんだろう？」

和葉はふっ、と息をはいた。

「ちよつとそこの…作品評価してる文見て下さい」

「ん？…アップルパイか…《とにかく素朴な味に驚いた。ごちゃごちゃした感じを一切感じさせない見た目と、素材の味を最大限に引き出した甘さ。聞けば砂糖は最低限とか。昔ながらでかつ、その作品には新しささえ感じさせる。トップに輝くのにとの作品より相応しい》……なんだ、あんまり詳しく書いてないな」

言いつつ、剛は徐々に顔をこわばらせた。

「モンブラン…？まさか」

リサはそつと呟いた。

「和葉さんが狙ってたのと……同じですよね…」

この評価がそのまま和葉の作品に向けられるはずだったのだが………。

和葉はがつくりと力尽きた。

休憩時間、リサはどこか哀愁漂う背中で麦茶を飲む和葉に恐る恐る声をかけた。

「あの…。大丈夫ですか…?」

「うん」

絶対嘘だ。としょんぼりするリサを和葉は面白そうに見た。

「なんでしょんぼりしてんの?」

「いえ…。なんと無く」

「なんだよそれ」

薄く笑う和葉の背中に、リサはぽすんと額を押し付けた。

「……。なにやってんの?」

「うふふ」

「……。うりゃっ」

ぐるっと素早く振り向いた和葉はバランスを崩したりサを軽く抱き締めた。

少しの沈黙の後、和葉はあゝと重いため息をはいた。

「にじゅーまん、欲しかったなー…」

「お金ですか…（笑）」

「んー、ま、良いけど」

ニツコリ微笑んだ和葉にリサは小首を傾げた。

「本当？」

「うん。てゆうか、そんな事で落ち込んでるヒマねーしな。リサ、またキスされそうになってただろ？」

リサは少し後ずさった。

見られてたの？

「あ…、はあ、まあ…」

「…無防備すぎ。俺の事好きって言ってるクセに」

「…そうですか？」

リサは本気で悩んで、俯いた。

黙って微笑んでいる和葉を、ちらっと見上げる。可愛らしく頬を染め、小さく呟いた。

「よく…わかんないんですね………」

リサはそう言うと、急いで店内に戻っていった。

あまりの衝撃発言に固まっていた和葉はやっとのことで呟く。

「…………マジか」

やばい。

何がどうヤバイのか分からないが…………。

和葉はただヤバイ、と繰り返していた。

l o v e s i c k n e s s 16

無防備すぎ。俺の事好きって言ってるクセに。

笑顔で、吐き捨てる様にそう言われた時、リサは身体中の血が一瞬凍ったように感じた。

「…そうですか？」

無防備……。そうなのだろうな、多分。

だけど……。あの日、私は決着を付けに行ったつもりだった。だから、キスされそうになった時、顔をそむけて拒否して、その上でちゃんと伝えようと思ってた。

だけど…、和葉さんは……。

どんよりしながら閉店した店内をホウキで掃いていると、瑠璃花が思いつきり不機嫌な顔でつついてきた。

「なんやの。しんみりして。可愛くない」

「可愛くない……。うん、私、すごく可愛くないよね……」

とっても好きで仕方がないのに、なんだか……。

問題が重くて……。

…傷付けてしまうのが、怖い。

翔馬は、大切な人だから。

恋愛感情では無いのは、和葉が近くにいる今、はっきりと分かる。

だけど、大切だ。

嫌われたく、ない。

好きだ、と言われた時、嬉しくなかったかと言えば、嘘になる。

でも……翔馬は、お兄ちゃんです。

その関係は、何があっても、壊せない。壊したらいけない。

それでも、恋愛じゃなくても、和葉さんがあの夜現れなかったら……
…翔馬の想いに応えようとしていたかも、しれない。

それが一瞬の気休めでも、“家族”を壊したくないから。

もう……私のワガママで大切な人たちを傷付けるのは…。

「もう、嫌……」

あふれてきた涙と共に、言葉も心から外に流れた。

瑠璃花に背中を撫でられ、私はゆっくりと呟いていた。

「今日、家…帰るね」

和葉は自宅で一人、スパークリングワインを呑んでいた。

もう嫌…。

丁度、見えた。苦しそうな顔で、涙を流していたリサ。

仕方がない……………？

慰められているのが格好悪くて、つい責めるような事を言ってしまった。

リサが悪いわけないって、わかってるのに。

でも、どうしても考えてしまうコトがある。

リサが俺を選んだ理由…………。

多分…、そのコトを考えてしまうせいで、リサを、好きだと認められない。自分が傷付きたくないのかも知れない。

あとさ、8歳差とか…ねえ？

……ホストなんか、しなきゃ良かったかな。

自分に、心に…………。

素直になれないよ。

ごめん、リサ。

リサが嫌なら、俺は…………。

朝。

翔馬が誤魔化してくれていたため、昨日は別に疑われる事もなく普通に両親と家で過ごした。

ただ、翔馬は大雅の家に泊まりに行ったためあまり顔を合わすことは無かった。

モヤモヤが晴れないまま、見慣れた教室の自分の椅子に座る。

クラスメートが騒ぐなか、ガラツと部屋に入ってきた女に、リサは目を丸くした。

「リサちゃん。城之内先生（じのうちに）が呼んでたよ」

「え？なんだろ」

あわてて箸を置いて立ち上がったリサに、一緒にいた萌歌（もか）が微笑みかけた。

「初日だしね。リサちゃん、委員だし」

「はあ……。行ってきます」

急いで廊下に出たリサは勢い余って人にぶつかりそうになった。

「…すみせんっ……。……柚樹先輩」

大雅は軽く笑った。

「よ。どうした？んな急いで」

「あ、えっと、城之内先生に呼ばれて」

リサの言葉に、大雅は顔を厳しくした。

「は？城之内……。マジかよ」

最悪の読みが当たった、というふうな顔をする大雅に、リサは瞬きした。

「えと……。柚樹先輩お知り合いだったんですか？」

前の先生が持病で入院したため、城之内が新しい音楽教師になったらしく、リサはまったく面識が無かった。

「いや……。名前知ってただけ……。……分かった。行こ職員室。俺も用があるからさ」

はあ。と首を傾げるリサの横を歩きながら、大雅は険しい表情を崩す事は無かった。

「…ああ、綾瀬さん。あら？貴方は…」

背中まで伸ばした髪をハーフアップにして緩く巻いた城之内は、リ

サの後ろで立っている大雅に微笑みかけた。

大雅も軽く礼をする。

「3 - Aの柚樹です。初めまして、城之内彩乃先生」

城之内は少し不審な目を大雅に向けたが、すぐにリサに目を戻した。

「うん？……まあいいわ。この資料を運んで欲しいのよね、次の授業で使うの」

「はい、分かりました。……え」

手を伸ばしたりリサより早く、ひょいっと大雅が教材の山を持った。

「いや、良いですって柚樹先輩」

城之内も言う。

「そうよ？私は委員の綾瀬さんに頼んだだけなのに」

その言い方に少しカチンときたりリサは大雅の持っている教材に手を伸ばしたが、簡単に避けられてしまった。

大雅は軽く城之内に微笑みかけた。

「俺、リサの下僕なんすよ。だからいーんです」

「はあ！？ちよつと先輩なに言つて」

城之内は、軽やかな笑声をたて、頷いた。

「成る程。じゃあよろしくね。もう行っていていいわよ」

大雅の発言による他の先生たちの目が痛い。

「…失礼します……」

リサは顔を真っ赤にして職員室を出た。

「っ… 柚樹先輩… なんであんなこと!？」

「ごめんって。ああそれよりリサちゃん、一つ約束して欲しいんだけど」

「… なんですか？」

真剣な雰囲気、リサは大雅の目を見た。

「俺も気をつけるけど、これから城之内に呼ばれたら俺を呼んで。絶対に一人で会うなよ」

いきなりの言葉に、リサは戸惑ったが頷いた。

「わ、かりましたけど。 なんですか？」

「… あ的女には気を付けろよ。マジでね」

教卓にテキストを置いた大雅が教室を出るのを見送ったりリサは眉をひそめながら、少し気になって大雅が運んでくれたテキストを持ってみた。

「……おも」

俺が十歳の時。

俺の母とリサの父親が正式に再婚したのはリサが高校生になってから。

だけどその当時俺の両親は三年前に離婚、リサの母親も数年前に亡くなっていたから、同じ職場だった二人が惹かれあつたのは必然的だった。

けれどー…。

その頃、たった八歳だったリサは、環境の変化に心がついていかなかった。

「ほら翔馬、綾瀬さんとリサちゃんよ。ご挨拶しなさい」

遊園地で俺達は初めて会った。

水色のワンピースを着たリサは、俺と俺の母を見て、満面の笑みをサツと曇らせた。

父親に隠れるようにして泣きそうに俯く。リサの父親も、困惑したように苦笑した。

母はキュッと俺の手を握り、リサの父親に笑いかけた。

「ごめんなさいね、私たちは別行動をするから」

「いや……。ほらリサ、失礼だろう、顔を上げなさい」

ふるふると首を振るリサに、母は小さく微笑み、俺の手を引いて観覧車に乗った。

観覧車の中から、リサが泣きながら小さな拳で父親を殴っているのを見ながら、母は悲しそうにため息をついた。

「やっぱりまだ、早かったかしらね……。……翔馬、貴方はどう？」

「別に……」

30分ほど経って、父親に説得されたのだらうリサたちと合流し、幼い子供専用の遊具がある公園で、俺とリサは二人で遊ぶ事になった。

その近くのベンチに座った親たちがなにやら話し込んでいるのを感じてまた泣きそうに顔を歪ますリサに俺は話しかけた。

「ねえ。遊ぶ？」

「……………うん」

それから、俺とリサはちよくちよく会った。

だが、ある日…。

母が俺を連れてリサの家に行った時、それまでおとなしく座っていたリサがサツと立ち上がって、そのあどけない容姿には似つかわしくない暗い顔で呟いた。

「お母さんが、かわいそう…。リサがお母さんと一緒にいる。お父

さんは、由梨さんがいるから大丈夫でしょ？」

啞然とする俺達を残し、リサはリビングを出ていった。

呆然と座っていたリサの父親より、顔面蒼白だった母が早く動いた。

「待って！」

リサの様子になにか悪い予感をしたのか、走ってリサを追いかけた母を、俺と父親は慌てて追った。

「リサちゃん！？」

案の定、リサは小さな、でもリサが持つと危険を感じさせるナイフを握りしめていた。

俺達に気付き、ソロソロ後ずさる。

「リサちゃん……………それを離しなさい」

「り、リサ」

二人が鋭く、震えた声をリサに向け、リサは怯えたように首を横にふった。

「だってお母さん、天国でひとりになっちゃうもん。だから、リサがそばに行く。私はこんなとこにいたくないっ！」

「リサ……………」

父はくたくたと座り込んだ。

それをちらつと見た母は、ゆっくりとリサに近付いた。

「来ないで」

「……………」

少し微笑みをリサに見せながら、母は近付く。

「大丈夫よ……………」

その時だった。

後ずさるうとしたリサはバランスを崩し、転んだ。

「リサっ!」

「リサちゃん!」

俺はリサのシャツが紅く染まるのを、ただじっと見ていた。

ドアの開く音で振り返った和葉に、入ってきた瑠璃花は鼻を鳴らした。

「残念やったね。私で」

「……………。別に」

和葉の背中に瑠璃花は軽く独り言のように語る。

「城之内彩乃？接触してきたみたいやで。大雅さん情報」

「……マジかよ」

「美術教師やて。調べてみたら、城之内って芸大出てるみたい。リサのことはバレてるな。なんでか知らんけど」

和葉はため息をついた。彩乃は元高級クラブのホステスだっただけあって、その情報網は凄まじい。

「なんかされたんだ？」

「軽い嫌がらせ程度で、リサは全く気にしとらんみたいやけどね」

「そつか……。はあゝ面倒だな」

「いやいや。どーすんのよ」

和葉はしばらく黙り込んだ後、瑠璃花を不思議そうな目で見た。

「前から言おーと思ってたんだけどさ、なんでそんな親身になってくれんの？」

「あかん？」

「いや……心強いけどさ。そういうの面倒くさそうだから」

瑠璃花は軽く笑った。

「まー…。そうなんやけどね。暇つぶし？いいやん、人の好意は素直に受け取るとき」

「…ご苦労さんです」

話ながらも、和葉は綺麗なホールケーキを遊ぶような手つきで完成させた。

瑠璃花は感心してため息をついた。

「上手いよなー…。剛さんとか翔太とかが作るのも綺麗やけど、和葉さんのはなんていうか…見てておもしろい」

「なにそれ」

「いや、誉め言葉やけど」

作ったケーキをしまった和葉は腕をくんだ。

「どうすればいい？」

知らんがな、と言いつうになったのをぐっと堪えて、瑠璃花は口を動かした。

「色んな感情を抜きにしても、城之内のことは和葉さんがどうにかせなあかんやろな」

「色んなねー…。翔馬くんは？」

瑠璃花は考えながら和葉を見た。

「私は、翔馬が悪いヤツとは思わん。っていうかめっちゃ不憫や。
……やけど、リサは和葉さんが好きなんよ?」

「知ってる」

「じゃあ、なんでいつも一歩ひいてんの。好きやろ、リサ」

和葉は洗った手をふきながら独り言のように呟いた。

「なんでかな」

「は?」

「なんで俺なんだろうね」

眉間にしわを寄せたまま瑠璃花が厨房を出て行って、和葉はカタンと椅子に腰かけた。

l o v e s i c k n e s s 19

翔馬とあまり顔を合わせないまま日々は過ぎ、今日も大雅と一緒に城之内先生のお使いをしていた。

今回は美術室の掃除。

ホウキで掃きながらふと外を見ると、弁当を食べる翔馬の姿が見えた。

美術室は6階にあるのであまりよく見えないが。

ただ、いつもと違う様子にリサは息をのんだ。

「え……？」

数人の男子と一緒にいるのはいつもと同じ。

だけどー…。

笑っていた翔馬の肩にその白い手がかかり、キスが落とされるのをただ見ていたリサに、大雅はため息がちに言った。

「……彼女じゃないよ。女友達ってとこ。向こうはどう思ってるかわからないけどね」

カラン、とホウキを床に落とし、美術室を出ていこうとしたリサの腕を掴んだ大雅は、静かに訊いた。

「…どうしたの、リサちゃん」

「……………」

「いいじゃん、別に翔馬が誰とキスしようが。だってリサちゃんは和葉さんを選んだんだよね。違う？」

強引に腕を引き、こちらを向かせた大雅は、涙でぐしゃぐしゃになったリサの顔を見て苦笑した。

「妹ちゃんは、ワガママだね？」

「……私は……」

黙り込んだリサに、大雅は唇を近づけた。

「え、ちょっ」

驚き、リサは慌てて身をよじったが、大雅の力に敵うわけもなく。

「んっ…………ふ……」

吃驚するほど優しいキスに、リサは困惑した。

唇が離れて、呆然とするリサに、大雅は軽く首を傾げた。

「…無防備だな、リサちゃん。……………で？」

「…………え？」

「決めた？自分のキモチ」

リサの瞳が揺れ、リサは目を見開いた。

「…あ……」

走って美術室を出ていったリサは、少しして振り返った。大雅に、泣きそうな顔で言う。

「ありがとうございました。私、柚樹先輩のおかげで…」

「いいから、早く行くなって」

「はいっ」

微笑みを浮かべたりサは、走り出した。

……分かりました、柚樹先輩。

自分のキモチ。
大切な人。

ありがとう、ございました。

目的の場所は、一つ。

リサは一心不乱に走った。

……。

カラン、とホウキが床を鳴らし、大雅は床に座り込んだ。

結局、俺は何をやってるんだろうか。

親友の長く辛い片思いも、……自分の恋も。

（どっちも終わらせちゃったな……）

後悔はしてない。

だけど、不安は、ある。

カツン、とヒールがフローリングの床を鳴らした。

茶色の緩く巻いた長い髪が、不機嫌そうに揺れる。

「どういうことかしら。綾瀬リサは、貴方の彼女じゃないのね？私を騙したの？」

「……なんのこと？」

立ち上がった大雅は、腕組みをした彩乃を見た。

「黙って下さいよ、先生……」

薄笑いの形に歪んだ唇を、塞ぐ。

長く、絡めとるような時が終わり、大雅は切なげな目を彩乃に向けた。

微笑んだ彩乃は、嘲笑の混じった瞳で大雅の頬に軽くキスした。

「残念ね……。もう少し、嘘くらい上手くなったほうがいいわよ、子猫ちゃん」

フツと耳に息を吹き掛け、彩乃は美術室を出ていった。

「はあっ……」

息を切らし、走ってきたリサに店の外を掃除していた和葉は本気で驚いた。

「え……学校？」

「さ、サボりました、多分……」

「は！？なにそれ、どーした、何があつた！？……まさか彩乃に」

青い顔で肩を掴んでくる和葉に、リサは微笑んだ。

ギュッと抱き付く。

「好きっ……」

「……リサ、お酒でも呑んだ？」

ふるふると首を振ったリサは、抱き付いたまま、和葉を仰ぎ見た。

「さつき、お兄ちゃんが知らない女の先輩に、キスされてるの見て、嫌な気持ちになりました」

「……………ほお」

「……………柚樹先輩に、キスされました」

「……………へえ。マジか」

「キスされて分かったの……………私、和葉さんが好きです…。キスされてる時、これで和葉さんに嫌われるんじゃないかって…一番、思ってた…怖かったんです…。……………無防備でも、嫌いに…ならないで…？」

「……………馬鹿。心配しただろ……………」

和葉はリサの手を引いて店に入った。

知らないバイトの人が驚いたような顔でこっちを見ているのをまるで気にしないで、和葉は誰もいない厨房に入った。

部屋の奥で、リサを抱き締め、ズルズルと座り込む。

「じめん……………」

「え……………？」

泣きそうに顔を歪めたリサの額に、和葉はキスを落とす。
もう、遅かった。

どんな心配があっても…。たとえば、俺を選んだのが翔馬を好きにならないための…無意識の一時しのぎだったとしても。

リサを、自分を……信じたい。

「俺も……好きです。リサのこと。……言っの遅くなつて、ごめん……」

「いえ……。嬉しい、です」

赤面した和葉はグシャグシャとリサの髪を混ぜた。

そのはずみで和葉の手首の銀色の細い鎖も涼しげに鳴る。

でも、もうそれはリサにとって不安要素になることはないだろう。いつもと違う赤い顔をする和葉。

どんな物より、誰より、大切な人。

「……恥ずい。こんなちゃんとした告白、初めてだ……」

それからしばらく落ち込んでいた和葉は、ゆっくりリサと目を合わせた。

「俺……かなり嫉妬もするし、元No.2ホストだし、二位だったし……ぶっちゃけ容姿以外、あんま良いところないよ……？」

リサは花のような笑みを浮かべた。

「私だって、無防備ですし。和葉さんと違って容姿も良くないです」

「リサは今まで会った女の子の中で誰より可愛いよ」

「……ありがとう」

そんなことまで、じっと瞳を見つめて言うから、顔が赤くなるのが分かる。

「ただ無防備は…。なおしてね。さすがに学校にまで俺行けないし。学校に瑠璃花みたいなのもないし」

「大丈夫ですよ」

「どっからくるんだその自信は…」

はぁ、と和葉はため息をついた。
だけど、腕の中のリサはあまりに可愛くて。

どうしたらいいか分からなくなって。そっと、優しく、リサの頬にキスをした。

l o v e s i c k n e s s 2 0 ・和葉（前書き）

これは今から四年前の、和葉のホスト時代のお話です。

……吃驚ですが、当時リサは12歳ですね（^| ^;）

和葉は20歳。

秀は23、正宗は22です。

l o v e s i c k n e s s 2 0 ・和葉

月曜日：俺の一週間は、朝6時から。

まだ少し暗い窓のカーテンを開け、着替えて歯を磨き、朝食の用意をする。

いつもならパン派なのだけれど、昨日正宗にお土産で漬物をもらったから、久しぶりに飯。

「いただきます」

「……ごちそうさまでした」

食器を片付け、洗面所に向かう。

今日は一週間でかなり大事な日。

家事……！！

たまっていた洗濯物を洗濯機に押し込んで、掃除機をかける。

あー…俺掃除好きだわ。

科学雑巾を使って隅のすみまでホコリをとる。

もう少し…と思っていたのに、ピーンポーンとチャイムが鳴った。

「和葉あー」

次いでドンドンとドアを叩く音。

俺としては無視して掃除を続けたい所だけれど、近所迷惑を考える
と…。

ガチャリ。

「おっはよー」

「…はよ。お前…。毎回毎回借金取りみたくドア叩くのやめ……おい」

「お邪魔しまーす」

楽しそうに俺の家に入った正宗はいつもの定位置に座った。

「だって今日は和葉の担当の日でしょー？昼飯。もうすぐ秀しゅうさんも来るし」

和葉は壁にかけた時計を見た。

「あー…もう10時か。よっしゃ作る」

パスタでいーかなー。

エプロンを付けていると、ピンポンとチャイムが鳴った。

急いで出る。

秀は、よっ、とはにかんだ。

「秀。入って。今から作るから」

「あ、秀さん来たー！どうするゲームでもしとく？いっぱいあるし」

「ここは俺の家だ」

俺の呟きに小さく笑った秀は正宗の隣に腰を下ろした。

「じゃ、遠慮なく」

「あつ、和葉早くメシー」

「おーい???」

食べ終わって三人仲良く手を合わせる。

「さ、じゃあまた後でなー」

「おー」

職場も一緒に、マンションも同じ階。毎週のこの時間は三人ともたいてい暇なので、最近は交代制で昼飯を作っている。

三週間に一度の担当とはいえ、結構疲れるなーと思いながら振り返ると、バチツと秀と目が合っと思わず後ずさった。

「おお！なんだよまだいたの秀っ」

「うん……和。相談があるんだ」

普段、仕事の時さえ表情が豊かと言っわけではないが、それでもいつもと全く違う、暗く神妙な面持ちで秀は口を開いた。

「……………実はー」

18時。ラフなパーカー姿で俺は店に裏口から入った。

二回目の留学資金と、小遣い稼ぎのつもりで働き始めてはや5カ月。いつの間にかN o . 2 になってしまった。

スーツに着替えて鏡のまえで適当に髪を整え、俺は息を吐いた。

「こんにちは、カズハです。…この店に来るのは、初めてかな?」

緊張した面持ちだったその若めの客も、俺と話すうち表情が和らぐ。酒を作りながら上目遣いで笑いかけると、彼女は頬を染め、俯いた。

変なクレーマーより、こういう客は楽しし可愛らしい。

談笑していると、少し離れた場所にいた正宗とバチツと目が合い、思わず顔をしかめる。

それに気付いて驚いた顔をしている客に慌てて微笑みかける。

「あ、ごめんね、気にしないでいいから……酒足りてる？俺まだ呑めるよ」

20になってからこの世界に入ったが、酒はけっこういける。ただ、ドンペリは不味いね。馬鹿みたいに高いけどさー。

指名が入り、席を立つ。

歩きながら、客と微笑みあう秀の姿が見えた。

いわゆるお坊ちゃんで、外の世界をまるで知らなかった俺にココでの生き方を教えてくれたのは、当時も今もN.O.1の、秀。立ち居振舞いから指名の取り方まで、親身に教えてくれた。

たまたま同じマンションで同じ階だったから、仲良くなりやすかったのかも知れない。

俺だってよくみるお隣さんがN.O.1ホストだなんて知らなくて、最初は正直ビックリした。

だって、二重人格とかでも無いんだよあの人。いつもあんまりレパートリーの無い表情をして、静かに喋る。口数も少ない。

でもあの人の客は何故かいい娘が多くて、トラブルも少なそうで羨ましい。

この店がかなり雰囲気が良いってことに少し昔に気付いた時は、秀の存在の貴重さに本当に感嘆した。居るだけでいいんだよね、多分…。

その秀を尊敬するホストは店外でもけっこういるんだけど、俺が来

るずっと前からこの店で働いていた正宗もその一人。

俺と秀が同じマンションって知って、羨ましがった拳句引っ越してきた。

あのマンションの16階には、appleのNo.3まで集まってるんだよな。

自分たちでもかなり不可思議な現象だと思います。

正宗とか秀は能天気喜んでるけどね。

まあ、賑やかでいいんだけどさ。

他愛ない事を客と話ながら、俺はさっき秀から受けた相談内容を思い出していた。

どう考えても不可解極まりない。

……何があつたんだろうか。

「……………うわぁ」

思わず呟いてしまった。

相談を受けた次の日、丁度祝日で店は休みなのだが……。

事情を知った正宗もついてきたので、一時間前から男三人、まばらに釣り竿を持っている人とか以外あまり人のいない海に、来ていた。

砂の上にシートを引いて隣に座った正宗が恐る恐る訊いてきた。

「なあ、あれ……。秀さんだよね……。？」

「他に誰がいるんすか」

「……なんか言いたいこと多すぎて何言っで良いかわかんないんだけど俺……」

「…………俺もだっで」

俺は昼の太陽の眩しさに辟易しながら、清楚な薄緑のワンピースを着た女とイチヤイチャしている秀を見た。

普段ないくらい緩んだ顔と伸びた鼻の下にイラツとする。

（ついてきてくれっでさ……。なに、なんの為に？）

「どっかのタチの悪いホステスとか、そういう女に会いに行くのかと思っでたよ俺……。うわーなに秀さんのあの顔。っでか彩サン？けっこう美人だけど和葉、見たことある？」

「ねえよ。っでか俺らはなんの為に来たんだ……」

そんな事をグチグチ言っでいると、秀の手を引いたその女がこっちに来た。

思わず身構えた俺と、瞬時に接客スマイルを浮かべた正宗に彩は微笑んだ。

「そろそろお昼ですね、ゴハンでも行きましょうか」

まあ、賛同以外出来なかった。

で、その日帰ってから、何度か四人で遊んだり、時には正宗がいなくて三人の時もあった。

正宗がいない時は俺も遠慮しようとしたんだけど、秀が、和が来てくれたほうがあいつも喜ぶとか言うから行ってたんだけど…。

なんか変だな、と思ったのは三人で遊んだ2回目の時。

秀が席を外した時、彩とかいうその女がこんなこと訊いてきた。

「カズ八君、このまま二人でどっか行こっか？」

「……はい？ からかわないで下さいよ。秀の彼女にそんな事言われたらさすがに驚きますって」

……その場は、笑って収まったけどさ。

後日、仕事前に正宗から耳打ちされた事も気になった。

『秀さん、彩サンに相当金使ってるみたい…。大丈夫かな、なんか俺…彩サン、ヤバそうな気がして……』

「ああ……そうだな」

正宗は、女に対しての直感が鋭い。

秀なら大丈夫だろうと思う反面、正宗の心配もわかった。

こういう仕事上、彼女〓都合の良い客みたいなの……。

店でお金を使ってもらう為に、キミは俺の彼女だよ、的な発言・行動は、正直、よくある戦略。

だけど、彩が店に来たのを見たことは無いし、同棲している訳でもない。

そして、俺に対するあの行動。

理解出来ない事ばかりで、気持ちが悪い。

思い切って秀に、止めといた方がいいと直訴しても、苦笑いを浮かべて

「うん……。でも、ほっとけなくてさ」

と、言うばかり。

仕方なく、俺なりにツテを使って北浜彩^{きたはまあや}について調べてみた。

すると。

北浜彩というのは偽名、本名は城之内彩乃で。……この街の高級クラブ、朔良^{さくら}のホステスだって、分かった。

見かけた事はあるはずなのに、普段と化粧方法が違って、分からなかった…。

もっと早く調べておけばと後悔すると同時に、彩乃の正体に愕然とした俺は、制止する正宗を無視して彩乃に連絡を取り、指定された場所へ向かった。

カードキーを使い、室内に入る。

ホテルの一室。そんな場に呼び出した時点で、こちらの動きはバレたようだということはわかった。

バスローブ姿の彩乃に、俺は薄く微笑んだ。

「こんばんは、彩乃サン」

「こんばんは、カズ八君。で、言いたいことって何かしら」

「わかってるくせに……。まあ、面倒くさい事は訊かない。俺としては、秀と別れてくれればそれでいい。二度と姿を表すなってところかな？」

彩乃は耳障りな高い声で笑った。

「そうね、そろそろ飽きてきたし。私はカズ八君に近付ければよかったのよ。まあ、apple・No.1って言うからどんなにかと一応あいつにも期待してたのに。ハズレもいいとこね……………」

「……………正直、ビックリだ。アンタなんかうちのNo.1が惚れるなんてね」

彩乃はふふつと首を傾げた。

「…………さて、別れてあげても良いけど、条件があるわ?」

和葉は口角を上げた。

「ん?なんでしょう」

彩乃は妖艶に微笑んだ。

「私を抱いて?お金はあげるわ。枕営業くらいした事あるわよね?」

「枕ね…あるけど。そんなんでいいんだ」

彩乃が座っていたベッドに腰かけ、完璧な所作で彩乃の唇をついばむ。

…その瞬間。

パシャ、と乾いた音が鳴った。

和葉の鋭い眼光を受け、彩乃はコロコロと笑った。

さっさと棚の奥からカメラを取り出す。

「さて、撮れた。…………どうする?」

和葉は背筋が凍るのを感じた。

（はめられたっ…………）

顔がこわばった和葉を面白そうに彩乃は眺める。

「やあね、強請りなんてしないわよ？…カズハ君が私を彼女にすればいいだけよ。そしたらネットに流出もしないし、」

彩乃の得意気な声がピタッと止まった。

和葉も彩乃の視線を追う。

そこにはー…。

「秀……」

呆然とした和葉の声に、秀の後ろにいる正宗が和葉の方を心配げに見詰めてきた。

だが、彩乃と和葉の意識は、少し猫背で俯き前髪で表情が隠れた秀にあった。

「彩乃……、やっぱダメ…か？」

一瞬、ビクッと小さく体を震わせた彩乃は優艶な笑みを浮かべた。

「ごめんなさいね、秀」

そのまま黙った彩乃に一つため息をついた秀は、くるりと俺達に背を向けて部屋を出ていった。

「待って！秀！」

秀を追いかけた俺に、正宗も慌ててついてきた。

エレベーターのすぐ近くで俺は秀を捕まえた。

「秀、秀。俺はー…」

「わかつてる……」

俺は、もう何も出来なかった。

小さく呟いた秀にー…。

いや。違う……。

初めて、俺に嘘笑いを見せた、秀に何も……。

それから、俺はすぐにapple・を辞めた。

それで、マンションも売り払おうと思っていた矢先、秀から短い手紙が来た。

正宗が、届けてくれた。

内容は、あの事には全く触れず……。

ただ、前から引越そうと思っていてもう部屋も決まっているから、お前はそこにいて、というものだった。

いつか会いに行く、と。

秀の新しい住所は書いてなかった。

……結局、俺は今でも待ってる。

彩乃が引き金になったとは言っても。

多分、俺の弱さのせいでも……、大切な友人にさえ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7236m/>

赤い糸

2011年10月7日00時46分発行